



—— 目 次 ——

---

◆10月11日(木) 佛教大学

講演1「近世における大蔵経出版について」	267
講演2「近代における大蔵経の編纂」	275
展示 近世・近代大蔵経の開版資料	288

◆10月12日(金) 花園大学

講演1「禅宗史における基本資料」	293
講演2「電子大蔵経の開版」	298
講演2「IT 初学者の電子テキスト利用法」	309
事例報告「DLS(CD-ROM ジュークボックス)について」	317

第6回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

---

平成14年3月31日 発行

当 番 校 佛教大学図書館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96

花園大学情報センター(図書館)

〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町8-1

## 第6回仏教図書館協会研修会 10月11日(木)

## 講演1 「日本近世の大蔵経出版について」

佛敎大学文学部助敎授 松 永 知 海

はじめに

釈尊は大医王なり、と經典に説かれている。それは人間の心の苦しみを直してくれる姿が、身体の病気を直してくれる医師の姿にかさなるからである。仏が医師であれば、八万四千といわれる法門は法薬といわれ、医師の処方箋にある薬である。僧侶は看護人となって、患者である衆生(生きとし生けるもの)を手助けする。患者である私たちが薬を飲むか飲まないか、それは一人ひとりの個別の問題ということになる。釈尊の説法は応病与薬とか対機説法とかという言葉で表わされる。医者は病状によって薬を与えるが、名医は同じ病状でも子どもにはあまい口当りのよい薬を出し、体力ある大人には苦くてもよく効く薬を処方する。機根(相手の理解能力)に対して法を説くという所以である。そして、釈尊がお亡くなりになられる時、弟子阿難に対して、これからは自らを依り所とし、法を依り所として修行に励みなさいと語られたという。仏法と人との関係は「人は法をよりどころにし、法はそれを信じる人を得て弘まる」ことになる。

さて、釈尊の説法は応病与薬、対機説法で個別であるから、仏滅後は教団として普遍的にまとめる必要があった。仏法の編纂である。これを「結集」(けつじゅう)と呼んでいる。釈尊が亡くなられて直に第1回が開かれ、その後3回行われたと言う。このことは逆に教団が複数のグループに分れていたことを意味する。それらのグループにはそれぞれ釈尊が説かれた説法(教法)と釈尊が説かれた戒律(教誡)と釈尊が説かれた教えの解釈

という三つのよりどころを持っていた。いわゆる三蔵といわれる経蔵、律蔵、論蔵のことである。三蔵が基となり大蔵経の編纂がなされた。

## 一、高麗版大蔵経と中世日本

韓国では顕宗(1010-1031)が契丹を撃退する祈願で、一〇一一勅をもって大蔵経の出版を命じ、はじめて大蔵経が雕造された。蒙古族侵入の折焼かれてしまったが、さらに高宗は仏力によって蒙古を折伏するため二三年(1236)に再雕を發願、三八年(1251)に完成し、再び大蔵経が雕造された。現在世界文化遺産として登録されている高麗版大蔵経がそれである。二度目であるから初雕本にたいして再雕本といい、またその版木枚数が八万余枚あることから、八万大蔵経とも呼ばれている。

では日本はどうであったのだろうか。たとえば元寇の時は退散祈願で仏像を造ったり、祈禱が行われたり、「四天王を信じれば、国を守る」という功德を説いた「金光明経」が写経され、四天王像に納められていたなどの事実が解っている。守りを固める土嚢を積んだり、軍隊の装備に国家の主力が注がれたのであろう。同じ蒙古の襲来にあたり、対応の違いが際立っている。

さて、日本の中世において大蔵経の出版の試みが全くなかったか、といういくつかの事例が明らかにされている。

①行円上人が弘安年中(1278-1287)勅を奉じて一切経の雕造を企てたが、その功を果たせず正安二年(1300)亡くなった。彼の弟子

智円は、行円の三回忌に、浄土三部経と五部九巻とを出版し、その題跋に先師の志願を述べている。

②相州靈山寺沙門宝積・如心・寂慧等が先師宴海発願のあとをついで今上皇帝・大皇太后・皇太后の聖寿祝延と関東大將軍家の息災延命と国泰民安のために大蔵印板を開鑿するという弘安十年（1287）九月の題記がある。伝法正宗記（南禅寺蔵）巻首などの刊記にそのことが書かれている。（図版1）また、記録としては貞和元年（1345）十一月十四日兵部丞源定規が一切経開版の業績によって臨時の任官が行われたことや、鎌倉の松谷寺で一切経の開版事業が始められたことが足利直義の智通上人に送った書状にあるという。これらは、いずれも大部な刊行ではなく、大蔵経刊行の発願があったという事実以上のものではない。やはり大蔵経の出版には莫大な資金と綿密な計画性がと必要であり、日本では期が熟していなかったとみるべきである。

幕府においては、機会あるたびに高麗の大蔵経の輸入を企てている。明の南北蔵経は勅版であった上、海上運搬の不安もあって、その輸入は難しかった。宋元版の舶載にくらべて明の南北蔵経の渡来のないのは、専ら高麗蔵を求めたからといわれている。高麗版大蔵経、あるいは高麗経由の中国からの大蔵経の輸入があったことは、日本に遺存する大蔵経からいえるが、記録の上からは足利義満の代から義澄までの約百年間に八十回もの請蔵があって、約半数が将来されているという。また足利義持は、応永三〇年（1423）とその翌年に僧を遣わし、高麗版大蔵経の板木をゆずりうけたい、と望んだが拒否されている。

## 二、近世の大蔵経

近世になって、大蔵経の印刷をはじめた僧が現れた。宗存がそれである。彼は朝鮮の高麗版を底本に經典の出版をはじめた。大正天皇の御即位を記念してはじめられた京都大蔵会においてその存在が知られ、第六回大蔵会で出版に際しての「勸進状」が展示されてその出版が確認された。昭和三十五年齋藤彦松という人は比叡山延暦寺慈眼堂の土蔵にあった木活字をこの宗存版の木活字だと発表し

た。実は慈眼堂＝天海僧正をお祀りしている御堂、そこでそれまで天海版の木活字だといわれていたものであった。滋賀県の教育委員会の調査がはじまり平成七年から文化庁の文化財調査の結果、これは宗存版の木活字約十七万個であると認められ、平成十二年十二月二十日に国の重要文化財に指定された。

その天台沙門聖乗坊宗存は伊勢高日山常明寺の住僧であって、慶長十八年（1613）正月に伊勢神宮内院常明寺に摺印一切経の奉納を発願し、京都北野経王堂においてその事業に着手した。このことは願文や『一切経開版勸進状』からわかるが、彼の伝記はもちろん生卒年すら分かっていない。慶長一十九年九月には建仁寺の高麗版大蔵経によって『大蔵目録』三帖を出版予定の目録として刊行し、これに発願文をおさめた。その奥書きに、

戊申年高麗国大蔵都監奉勅彫造一代蔵経、開梓摺写報仏恩徳、結縁衆生同証  
仏果二世安楽、乃至法界平等利益。大本願伊勢聖乗坊宗存（花押）

慶長十八癸丑年九月吉日於洛陽梓之。

当施主開版 吉野入道意齋西田勝兵衛尉  
く戊申高麗高宗三五年(1248)（第六回大蔵会展観目録大正九年十一月）

とあって、慶長十八年（1613）にまず『麗蔵』の目録を和刻にして出版した事がわかる。この開版の施主西田勝兵衛は寛永（1624-1644）から寛文年間（1661-1673）まで京都寺町二条下ル妙満寺前にあった書肆であり、常明寺については『伊勢参宮名所図会』（寛政九年刊行1797）に、つぎのようにいう。

常明寺、高日山法樂院といふ。間の山より北にあり。当所第三の大寺なり。

本尊薬師にて天台宗、額は後陽成院御宸翰、本堂並山門等巍巍たり。聖徳太子の建立ともいふ。按るに此地尾部陵の所に方角相応して、いにしへ尾上寺又は泉寺又天福寺などいひしも此寺の事なり。尾部坂にあるより尾上寺といふ。あか井の清水ありしより泉寺の名あり。其後廢せしを再興して天福寺といひしは是天福年中再興の故なり。今は松垣家常明再建せしより常明寺といへり。

版式は、一行一四字詰め二二行、ないし一

行一七字二三行で、はじめの糊しろのところ  
に経論名、巻数、枚数、千字番号を細字で刊  
記し、巻末に、「(甲寅など干支) ○○歳大日  
本国大蔵都監奉勅彫造」と刊記がある。

これは高麗再雕本の形式に倣うもので、違  
う処は整版でなく、文禄慶長の役によって朝  
鮮から伝来した新しい技術の木活字印刷によ  
るもので、折帖に装幀した点である。慶長末  
から元和をへて寛永のはじめに至る前後十余  
年にわたる出版であるが、元和四年(1618)  
以降の刊記には「奉勅彫造」の文字がみえな  
くなり、刊行の仏典の種類も大蔵経から天台  
宗の章疏や一般書に変わっていく。当時は後  
水尾天皇の御代であるが、後陽成上皇の在世  
であった。上皇は元和三年(1617)八月二六  
日、47歳で崩御となった。このことが刊記か  
ら「奉勅彫造」の文字が消える理由であろう  
といわれ、現在一四〇部が現存している。最  
後は寛永元年(1624)十一月十日の『法苑珠  
林』巻八一である。以後の出版がない理由は  
不明であるが宗存が示寂したためであろうと  
考えられている。その宗存版を天海が所持し  
ていたことが明かとなっている。

『大蔵目録』三卷(日光山輪王寺天海蔵)

『顕戒論』元和三刊(1617)

『正因果集』元和四刊(1618)

『妙法蓮華経〔抄〕』元和七刊(1621)

『源信枕雙紙』同上

『法華経品釋』同上

『無量義経〔卷釋〕』同上

『法苑珠林』元和七刊(1621)から寛永元  
年刊(1624)

『天台四教儀』元和九刊(1623)

小山正文氏は『法華玄義科文』(龍谷大学  
所蔵)巻一之一見返しに「前大僧天海寄進」  
墨書や蓬左文庫所蔵五帖九帖の宗存版が尾張  
徳川家義直(1600-1650)の蔵書であったこ  
を示す「御本」印が押されているが、元来  
それは父家康旧蔵のいわゆる「駿河御讓本」  
であったらしいと推定し、ここに宗存-天海-  
徳川家の関係も考えられて興味深いものが  
あろう、と述べている。

山科の毘沙門堂経蔵調査でこれを裏付ける  
宗存版が見つかった。毘沙門堂はもともと出  
雲寺とよばれ左京京極出雲路にあり毘沙門天

がまつられ、人々の信仰を集めていた。それ  
が近世になって廃絶していたのを慶長年間の  
末に後陽成院から天海へ毘沙門堂の号を賜わ  
り、寺を再興することを命じられた御寺であ  
る。天海(1643没)が亡くなるに及んで法嗣  
の公海は將軍家綱の援助を得て、寛文五年  
(1665)山科の現在地に寺領を賜わり、堂宇  
を整えた。この経蔵は寺伝によると天和二年  
(1682)に完成したが、そこには天海版大蔵  
経が二百九十の函に納められている。一函に  
二帙乃至三帙が納められており、その帙の芯  
紙に宗存版が使われていた。表紙となっている  
茶色の厚手の紙には天海版の試し摺りに使  
われたと思われる紙が使われていた。最初見  
た時は同類の試し摺りかと思ったが、肉太の  
書体であり違和感を覚えていたが、刊記の部  
分をみるにおよんで、それらが宗存版である  
事が判った。そこにはいままでには知られて  
いない

七佛八菩薩所説神呪經

過去現在因果經(図版2)

大吉義神呪經 元和七年

などの経典が使われていた。

また、更に驚くべきことは、「東叡山」の  
墨書(図版3)や「東叡山日記」(慈眼大師  
全集下)を補うものと思われる墨書がその帙  
の芯紙に使われていた。

天海版大蔵経が完成してから、毘沙門堂の  
経蔵ができるまでは33年ほど経過しているわ  
けだが、これらのことから初期に摺られた  
天海版の大蔵経であることがわかる。宗存と  
天海は同じ天台沙門としての交流の有無は別  
として、天海がかなり宗存の大蔵経刊行の事  
業を意識していたことは理解できる。

### 三、天海版大蔵経の完成

日本で最初に大蔵経の出版を完成させたの  
は天台宗の天海である。大変長命で108歳で  
亡くなられたと一説には伝えられているが、  
寛永二十年(1643)に亡くなっている。寛永  
十四年(1637)にはじまり12年を費やして慶  
安元年(1648)に出来上がった。木活字を用  
いて一紙24行四折の折本仕立、一面6行、一  
行17字を基本としている。木活字は木片1個  
に一字を刻み、部首別に分類整理しておく、

底本となる經典に基づき一字一字集字して、それらを一枚の板のようにするために隙間を埋める材を用いて締めつけて摺りあげる。この方法だと初めに何部印刷するのかを決めていれば、校正も簡単で、版木を堆く積み上げる置き場所にも困らない。木活字を分類収納する箱のスペースで済んでしまう。現在上野の寛永寺にはその木活字を含め約28万個が残されている。短所は一度摺りあげてしまうと、解版してしまうためあとから摺り増ししたい時は、もう一度組版仕ささなければならぬことである。

目録の上から宋版に基づいているといわれ、底本は川越喜多院の蔵本を使い、茨城県最勝王寺の宋版を校合に使ったといわれている。なお、喜多院の蔵本は宋版思溪版を主とし元普寧寺版もはいたった混合蔵である。摺本からみると、明の万曆版も一部に使われている。

さて慶安元年に出版された天海版一切経最後の「最」箱にある「日本武州江戸東叡山寛永寺天海版一切経新刊印行目録」全五巻とそれを翻刻した「昭和法宝目録」所収の目録が一般によく引用されているが、共に誤りがある。1453部6323巻としているが正しくは目録を含め1454部5781巻である。ただし般若心経などの同巻の經典もそれぞれ1巻と数え、目録も含めると6323巻となる。また、經典の順序や經典名なども目録と摺られた經典とは相違する。

經典をみると、活字を組む「うへて」と呼ばれる植字者の名前が紙継ぎ部分の左右の端に小さい活字で摺られている。また表表紙の内側に「久兵衛折」「折手長三郎」などの名前もまま見える。函数六六五というのは必ずしも厳密な規格があったわけではない。山科毘沙門堂の函数は二九〇の函に納められており、青蓮院と叡山文庫所蔵の天海版はともに六六五函であるが、函内の經典は少しずつれており、一致していない。

また、白紙の部分、言い換えると活字が印刷されていない部分が2箇所ある。それは四十巻本『華嚴經』の第十九巻第十紙と『佛説七俱胝佛母准提大明陀羅尼經』第一巻第十一紙とである。いずれも、底本となった本に落

丁などの問題があり活字を組めなかったことが予想される。さらに本文のなか、一字もしくは複数字印刷されていない箇所がある。

- ①『摩訶僧祇律』第27巻第21紙3行目第2字3字「布薩」の欠字
- ②『舍利弗問經』第8巻第17紙5行目第7字8字の2字空白。
- ③『阿毘達磨大毘婆沙論』第19巻第17紙6行目、第1字より第7字の「異熟問若異類而」の欠字
- ④『阿毘達磨大毘婆沙論』第114巻2紙6行目第5字6字の2字「云何」の欠字
- ⑤『佛本行集經』第18巻第5紙24行目第3字の「我」の欠字

などである。これらの箇所も底本の虫食いや版木の欠けによる欠字などが予想され、底本特定の手がかりとなる箇所である。

印刷部数については、現存の部数から推定すると、多くとも三十部程と考えられる。もともと、天海版一切経の出版意図は『徳川実紀』に（『大猷院殿御実紀』<新訂増補国史大系第四〇巻>五三八頁上下）

これは御神いまだ世にましませし時、慈眼大師の願により、東叡山にて開版命ぜられたる一切経、此ごろ全部剞劂の功をなしければ、五百余函を神前の西方に陳設して、備ふる所なり。

とある。願文にあるように家光の「武運長久」や「吉祥如意」、あるいは国の安泰や五穀豊饒にあったとしても、どこにどのように納めようとして、この刊行が始まったのかは分からない。製本の時期をみると、『徳川実紀』に慶安元年四月、家康の三十三回忌の法要に天海版一切経が奉納されたことを記している。また東西両本願寺や青蓮院にも翌年までには納められているが、京都山科本圀寺は完成から三十五～三十九年後の貞享から天和年間にかけて製本されたことが、わかっている。

天海版一切経には刊記とともに願文が摺印されている。総数三百二件あり、天海が亡くなる寛永二十年（1643）までの刊記は七年間で僅か二九件であったが、翌年から五年間で二七三件と完成を急いだことがわかる。

願文のうち最初のもは、仏の教えではなく、六派哲学のサーンキヤ学派の学説が書か

れている『金七十論』であって寛永十四年十二月十七日の日付である。そこには、(図版4)

奉再興 佛説一切經藏  
 今上皇帝 玉體安穩  
 東照權現 倍增威光  
 征夷大將軍左大臣源家光公武運長久  
 四海泰平 國家豐饒  
 佛法紹隆 利益無窮  
 日本武州江戸東叡山  
 山門三院執行探題前毘沙門堂門跡  
 大僧正天海願主  
 寛永十四年丁丑曆十二月十七日

林氏幸宿花溪居士葉行とある。このなかで重要と思われる三点を指摘することができる。

まずは、第一行目の「奉再興 佛説一切經藏」という文言である。再興というからには初興を意識している訳であって、宗存版一切經を念頭においての文言であろう。なお、この「再興」とするのは全一六四件で正保三年四月六日までの願文で、以後は「奉彫造 佛説一切經藏」である。

第二点目は願文を大きく分けると家光公の武運長久を願うものから吉祥如意を願うものになって行くことである。それは正保二年十一月二十九日の願文と同年十二月二十六日の願文であって、願文はこの両日を境にはっきりと分れるのである。

第三点目は最後の慶安元年の願文に記されている慈眼大師号についてである。慶安元年四月十一日、後光明天皇勅し、天海墓前にて勅使慈眼大師の追号の勅書を読むことが『徳川実紀』につきのように書かれている。

この日 勅使五條少納言為庸日光山天海の墓に参向して、慈眼大師の追号給はりし勅書をよむ。これは傳教、弘法、慈覺、智証の後は、七百余年其ためしなき事なれども、今この大師は、神祖こと更御帰依たるをもて、勅許せられしとの趣なりき。

しかし天海版一切經の慶安元年三月十日と十七日の両日の願文(4件全部)には既に慈眼大師号が使われている。すると、すでに約一カ月前には決定していたことがわかる。

#### 四、黄檗版

日本で最初の流布版の大藏經を完成させたのは黄檗僧の鉄眼(1630-1682)であった。彼は日本に流布している大藏經のないことを嘆き、その出版を思い立ち、宗祖隱元から明の万曆版をもらい受けた。寛文十一年(1671)より刻蔵がはじまり天和元年(1681)一応の完成をみる。

全蔵ではないが延宝六年(1678)製本がおわった黄檗版大藏經が後水尾上皇に献上され、さらにそれは日野正明寺に下賜された。その版本は重要文化財として昭和32年(1957)2月19日付で48275枚が指定されている。

版本による出版は一枚の板に活字を刻んだもので、黄檗版は大概をいえば、約横82cm、縦21cm、厚さ1.8~2cmの節のない桜材の板に片面2面、表裏合せて4面分が刻んである。一面は一行20字、20行で中央の部分は版心といって、上から三蔵などの分類、典籍名、巻数、丁数、千字文巻次などが刻まれている。このことは、方冊本に綴じられているから、版心により直に読みたい經典の箇所を探し出すことができるので、従来の折本や卷子本、あるいは粘葉装本などとは比べものにならない位、読む人にとっては便利な装幀であった。それは底本である明の万曆版そのままを踏襲したもので、整版で方冊本ということは、はじめから多くの人々に大藏經を読んでもらうために便利なものを鉄眼は考えてのことと思われる。目録でいえば明万曆版正蔵の覆刻のみをもって黄檗版というが、それだけではない。完成を急ぐためか、安価にするためか和刻本を入れ版したり、『万曆版』正蔵には入蔵されていないものを出版したりしていることがわかってきた。いま一つ特筆すべきは『麗蔵』を底本とした出版のあったことである。

これは、真言宗新安流の祖であり、梵学を復興した僧としても名高い浄嚴覺彦(1639-1702)が鉄眼に出版依頼したものであった。『浄嚴大和尚行狀記』の延宝二年(1674)の条に、

此時ニ当テ黄檗山鐵眼道光禪師大ニ化門ヲ開キ、大藏經ヲ梓行シテ黄檗山宝蔵院

ニ納ム。吾師、信ヲ通ジテ其道投合ス。藏中ノ秘密經軌ヲ別ニ目錄ヲ出シ、藏中ノ欠本十卷ヲ加ヘ居シメ、諸人ニ求メシムルカ故ニ、天下ニ諸儀軌ヲ持スル者六百余人ナリ。

とあって、二人の親交を記している。浄厳は真言宗の基本となる儀軌に関する『仏説秘密儀軌衆法經總目』という目録をつくり、その普及をはかった。そこで刊行されつつある『槃蔵』によって儀軌典籍を揃えようとしたが、そこに入蔵もされておらず、和刻本にもない典籍を鉄眼に頼んで新しく開版してもらっている。

この目録は『大日本仏教全書』95巻159頁に翻刻がある。浄厳の要請であるから、高野山の『麗蔵』を使用した可能性が高いと思われる。いまその目録に挙がっているもののうち、巻末に、

高麗国大蔵都監奉 勅雕造

という記載のあるものをあげると、

金剛頂瑜伽一字頂輪王一切時處念誦成仏儀軌 一卷

十地經 九卷

大集大虚空蔵菩薩所問經 八卷 (図版5)

修習般若波羅蜜多菩薩觀行念誦儀軌 一卷

觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門 一卷

大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴王經 三卷

の六部二十三巻である。

また、高麗版底本では、鉄眼初刷りの後水尾天皇に献上したものの中に「十住毘婆沙論」が含まれている。この第一巻末に「癸卯歳高麗国分司大蔵都監奉勅彫造」とあり、第十七巻末に「寛文六丙午年開板」とある町版である。法然院本は万暦版の覆刻であることを考えると、鉄眼在世中に十住毘婆沙論は入れ版を改めたと考えられる。

このような底本の出入はあるが、一般に黄檗版といわれる明万暦版正蔵の分については275帙に納められ、頒布された。たいした資金も、後立てとなる協力者もなくはじめられた大蔵経の刊行は、鉄眼の情熱とそれに応えた人々の合力で完成した。これらの協力者に

ついては黄檗版大蔵経の刊記に、どこの国の、誰から、いくら寄進されたのか記されている(図版6)。天和元年(1681)のことで、その年は飢饉があり、鉄眼は難民救済のための施財協力のためにしたためた手紙が残っている。

こうして出来上がった黄檗版大蔵経は大蔵経請去總牒という初期の販売台帳のような本によれば405蔵もが全国各所に納入されたという。また全蔵漸請千字文朱点という宝蔵院に所蔵されている台帳によれば2225箇所にのぼる黄檗版大蔵経の所蔵者の名前と納入時期などが記されている。それによれば、配本は一度に行われるのではなく数回に分けているのが一般的で、中には十数回に及ぶところもあった。製本の関係もあるが、代金の支払も考慮にいれれば、当然のことといえよう。

275帙1654部6995巻ともいわれているが、これは明の万暦版正蔵のみの部数と巻数で、そこに入蔵されていない鉄眼が浄厳の要請によって出版した秘密儀規の一部や蔵外典籍、語録類などははいっていない。さらに重要なことは、明の万暦版正蔵に入蔵されている經典のなかにも、はじめ町版を使って摺られたもののなかに、後から万暦版をもとに開版していくのであって、摺印時期によって変遷があることである。このことは、鉄眼版=黄檗版=明万暦版(正蔵)では決してない。鉄眼が出版した大蔵経の目録さえないというのが正しい認識である。

## 五、近世の大蔵経の校訂

近世の大蔵経の出版は宗存・天海・鉄眼の三人でつくるが、大蔵経の刊行とくに流布版の黄檗版大蔵経の普及により全蔵にわたるテキストの校訂が行われた。そのはじめは法然院中興第二世の忍淑(1645-1711)である。彼の伝記によると、刊行途中の黄檗版の『大乘本生心地観経』を読んでいたところ文意の通じない箇所が多々あった。偶々安然和尚の著した『普通授菩薩戒廣釋』に引用する経文と比較すると、果たして漏脱があった。いろいろ黄檗版大蔵経の経文を閲して意味の通じない箇所のある毎に、黄檗版大蔵経と善本とを対校して誤りを正していきたいと思ってい



た。そこで建仁寺の高麗版大藏経と黄檗版大藏経との対校を決め、江戸芝増上寺より直絃を上首とする学生十余人をよびよせた、という。

その事業は高麗版と黄檗版とを比べ、朱筆で黄檗版にその相違点を記入する方式で、正確を期すために一卷について三人が校正していった。宝永三年（1706）二月十九日にはじまり、足掛け五年の歳月を費やし宝永七年四月に対校事業を終えた。

忍激の事業は単に『黄檗蔵』を『高麗蔵』に対校したことによってのみ評価されるべきではない。同等に評価されるべきはその対校録の出版である。それには大分して二種類ある。

①相違した点のみを出版する校正部  
②『黄檗蔵』に入蔵がなく、かつ『麗蔵』に入蔵の典籍を出版する欠本補欠部  
従来対校録は①の校正部のみであったかのように言われてきたが、②の欠本補欠部も重要である。まず、校正部は全百巻の出版予定であったが、法然院を中心に実際に確認できたのは五六巻までであるから、それ以上の出版はなかったとおもわれる。

般若部

三巻三冊 通巻一～三（図版7、8）

宝積部

四巻四冊 通巻八～十一

大集部

五巻五冊 通巻十二～十六

華嚴部

四巻四冊 通巻十七～二十

涅槃部

三巻三冊 通巻二十一～二十三

重訳経部

十二巻十二冊 通巻二十四～三十五

単訳経部

十巻十冊 通巻三十六～四十五

小乗経阿含部

七巻七冊 通巻四十六～五十二

小乗単訳経部

三巻三冊 通巻五十三～五十五

宋元入蔵経部

一卷一冊 通巻五十六

欠本補欠部のなか第一に挙げられるべきは慧

琳撰『一切経音義』百巻（元文三年1738）と希麟撰『統一切経音義』十巻（延享三年1746）の刊行であろう。また儒学者服部南郭（1683-1759）はその貴重な所以を述べ、さらに、明治初期には清国駐日公使の楊守敬（1839-1915）が本国に貴重な典籍として紹介している。その上に民国二年（1913）には上海から出版されたという。1986年にも上海古籍出版からこの法然院蔵版本を影印出版している事によっても後世への影響の大なることがわかる。その注目すべきは編纂者の一人宝洲が序に於て、

雒西五智峯如幻空大徳、東都敬首律師嘗竭心思為之（音義書）校閲。然於高麗原本間亦非無字句譌脱倒置衍騰等差。今概存原本不敢妄点竄。

と述べていて、実際に少しく直している点である。『麗蔵』だからといって無批判に出版した訳ではないことがわかる。

そのほか、同様の出版として、つぎのものがある

① 光讚経 二巻 竺法護訳

この經典は『黄檗蔵』にも『高麗蔵』にもともに十巻本として入蔵されているが、出版の理由は『麗北兩蔵相違補欠録』に、

此光讚経一部十巻北蔵展麗蔵前八巻而為十巻以為一部而実欠後第九第十之兩 卷故写其兩卷而補北蔵之所欠者也  
とあるように、巻九、十の二巻を出版したものである。

②根本説一切有部毘奈耶藥事 十八巻 義浄訳

③根本説一切有部毘奈耶出家事 四巻 義浄訳

④根本説一切有部毘奈耶安居事 一卷 義浄訳

⑤根本説一切有部毘奈耶随意事 一卷 義浄訳

⑥根本説一切有部毘奈耶皮革事 二巻 義浄訳

⑦根本説一切有部毘奈耶羯耻那衣事 一卷 義浄訳

⑧六趣輪廻経 一卷 馬鳴集日称等訳

⑨諸法集要経 十巻 觀無畏集日称等訳

⑩福蓋正行所集経 十二巻 龍樹集日称等訳

⑪父子合集経 二十巻 日称等訳

⑫東方最勝燈王陀羅尼経 一卷 闍那崛多訳

⑬別訳阿含経補欠 一卷

（明本第七巻末婆耆闍減尽次麗本更有此一巻）

⑭福力太子因縁経 一卷一冊 施護等訳

この經典は『黄檗藏』には三卷、『高麗藏』には四卷本として入蔵されているが、出版の理由は『麗北兩藏相違補欠録』に、此經北藏唯有上中下三卷麗藏忽有四卷然対北本於麗本北本但以麗本前三卷分为上中下而実欠此第四卷故今写録之者也とあるように、第四卷のみを出版したものである。

⑮ 仏説難陀計淫嚙囉天説支輪經 一卷 法賢訳

⑯ 無能勝大明王經 一卷 法天訳

⑰ 金光王童子經 一卷 法賢訳

⑱ 尼乾子問無我義經 一卷（右自四紙至八紙小卷） 馬鳴集日称等訳

このような忍叡のおこなった事業は、善本で希少な高麗版と流布版として購入されていた黄檗版とを対校したにとどまらず、その対校録を出版して、黄檗版を読む人が高麗版をも合わせ読めるようにしようとしたことである。

ところで、大蔵經の校合は忍叡だけではない。文政九年（1826）より天保七年（1836）まで越前浄勝寺丹山順芸は息子二人らと共に、やはり建仁寺の高麗版と黄檗版との対校事業を興し完成させている。翌年天保八年九月に建仁寺が出火し大蔵經もごく一部を残し焼失したことで、ただちに東本願寺は十一月に丹山にその対校の副本を作るよう命じている。現在の大谷大学図書館所蔵の対校本はその副本である。

遡れば、写經の時代から、たえず經典は善本との対校をして受け継がれてきた。中世においては写經の功德とともに対校の功德などもあった。このような善本を重んじる伝統を近世においてもみることができる。

妙心寺では寛文年間において蔵經設備を決定し、なにを大蔵經として求めるかの撰定の議があったことを伝えている。その議にかかわった龍華院竺印は天海版には誤字或いは横倒の不都合があるといい、最終的に建仁寺の高麗版を謄写することにした、という。美濃より特注の紙を摺らせた大事業である。これなども天海版のいくつかの經典を校訂した上での判断と考えられる。このとき黄檗版は事業が始められたばかりの時期であった。

## おわりに

以上、近世の大蔵經を概観し、忍叡を中心とした対校事業の影響をのべた。この時代は宗義・宗派を究めようとする宗学が盛んになった一方、各宗派間の論争や、それらの枠をこえて仏教を根本から理解していこうとする学僧を輩出した時代でもあった。それを育んだ土壤には黄檗版大蔵經の出版があり、根本には求法・弘法の本質があった。さらに明治、大正と大蔵經が出版されているが、そこでも黄檗版大蔵經や忍叡の対校事業が利用されていることを忘れてはならない。

（まつなが ちかい）

## 参考文献

小山正文「宗存版一切經ノート」（『同朋仏教』20・21合併号）（昭和61年5月）

滋賀県教育委員会『延暦寺木活字関係資料調査報告書』平成12年3月

水上文義「新指定重文・延暦寺蔵『宗存版木活字』について」（『天台学報』43号 平成13年11月）

佛敎大学通信教育部『仏敎書誌学』

## 追記

研修会二日目、花園大学図書館のご尽力により、妙心寺山内をご案内いただき、特別に經蔵を見学することができました。高麗版を端正に写經した教典を手執ることができたことは、大変貴重な体験で関係各位の皆様へ尽々の謝意を申し上げます。

第6回仏教図書館協会研修会 10月11日(木)

## 講演2 「近代における大蔵経の編纂」

京都大学人文科学研究所助手 梶 浦 晋

江戸時代末期から明治初期にかけて、西洋の近代的な金属活字印刷の技術が伝来すると、さまざまな典籍が活字を以て印刷発行されるようになった。仏教典籍もまた、江戸時代末期までは、木版や古活字版や近世活字版と呼ばれる古典的な印刷技術あるいは書写によって流布していたが、明治以降そのほとんどが金属活字印刷に付されようになった。仏教典籍は個々の典籍が単行本として流通するほか、大蔵経のように多数の典籍を集めて流通させる形態があるが、ここでは漢訳大蔵経の刊行を中心に、近代の仏教典籍刊行の歴史を概観することとしたい。

## 近代日本の漢訳大蔵経出版

近代日本においてさまざまな大蔵経や仏教関係の全書類が刊行されたが、そのほとんどがさきに記したように活字印刷や写真製版技術を用いて印刷されたものであった。前近代においては、典籍はごく一部が木版印刷に付される以外ほとんどが書写によっていた。大蔵経もまた、奈良時代より江戸時代初期までは、書写や中国、高麗・李氏朝鮮からの輸入によっていた。

江戸時代のはじめに宗存の発願によりはじめられた木活字版による大蔵経の刊行が本邦最初の刊本大蔵経であるが、残念ながら未完に終わった。その後、時を経ずに天海版大蔵経(木活字版)、鉄眼版大蔵経(木版)と呼ばれる二種の大蔵経が刊行された。天海版は印刷部数も限られ実用に付されることは少なかったが、鉄眼版は木版であり、再印が比較的容易であるため、江戸時代を通じて数多く

印刷され、今日も各地の寺院などに収蔵されているものも少なくない。鉄眼版の流布が江戸時代の仏教学の発展に大きく寄与したことは周知のことである。

明治以降も鉄眼版は印刷しつづけられたが、新たに金属活字で刊行された三種の大蔵経がもっぱら利用されることとなった。以下それぞれの大蔵経の刊行過程やその内容について記すこととする。

## ◎大日本校訂大蔵経(縮蔵)

日本で最初に金属活字を使用した漢訳大蔵経は、『大日本校訂大蔵経』である。この大蔵経は、小型の五号活字を用い、携帯に至便な形態のため『縮刷大蔵経(縮蔵)』と呼ばれている。明治十四年(1881)に出版がはじめられ、同十八年(1885)まで四年の歳月を費やし、菊判線装本40帙419冊が刊行された。

『縮蔵』出版の中心となったのは、もと天台宗本山派修験道大先達であり、明治維新ののち教部省や内務省社寺局などにいた島田蕃根と増上寺の福田行誠であった。島田は廃仏毀釈で疲弊した仏教界の再興などを企図し、人々が容易に大蔵経を閲読できるように、近代的活字印刷による大蔵経の出版事業を思い立った。島田は福田に、増上寺所蔵の大蔵経を底本および校本として使用することををはかり同意を得、弘教書院を興し事業をはじめた。印刷出版の指揮にあたったのはアメリカで印刷技術を学んできた色川誠一であった。弘教書院はこの大規模な事業の経済的困難を解消するために、色川の提言によって当時としては珍しい予約出版の形式で刊行計画をたてた。一部120円・1,000部出版の予定で予約を

募り、仏教各宗派に協力を要請した。このころ各宗派の本山や宗務所の多くは京都にあり、色川が京都へ赴き協力を要請したが、はじめはあまりおもわしくなかったが、東西本願寺が各々500部づつを引受けたのを契機に、事業は軌道に乗ったといわれている。最終的には160円・2,500部という大規模な出版となった。ちなみに西本願寺では明治十九年度の決算に、蔵経代として59,480円61銭9厘を計上しており、これとは別に紙型版費として明治十六年度から十八年度にいたるまで合計55,837円7銭を支出し事業を支援している。

経済的な支援のみならず、編集校正の人材も当然のことながら、多くは仏教各宗派の関係者であった。校正者ははじめ次にあげるような広告を雑誌・新聞などに出したが人を得ず、後には各宗派から人材選抜し任命することとなった。この校正に従事して後に名を成した仏教学者も多い。

#### ○一切経対校者募集広告

本院縮刷一切経対校者今般増員致し候に付、有志の僧衆は至急御照会有之度候也

但し護法篤志者にして、容易に無点の仏典を讀得る者に限るべし、

#### 東京芝公園地第三号 弘教書院

校正の方法は、はじめに高麗蔵を底本に原稿をおこし句読点を切り、その原稿を一人が大声で読み、傍らの三人が各々宋版・元版・黄檗蔵を見て異同のある箇所を声を出し指摘し、その由を即座に原稿に記載するという手順であった。校正者は真摯な態度でこれに臨んだようで、臨濟宗からおくられた校合者に対して示された注意書には、

一、大蔵経対校の儀は最も重任にして、輕易に非ざる旨を体認し、専ら事業の円成を期し、黽勉従事すべきこと

一、能く六和の徳を修め、対校場規則を堅く守るべきこと

一、若し不都合の事故これあるときは啻に吾宗の慚悞のみならず、実に一大盛事の瑕瑾なり宜しく戒慎省慮すべき事

十四年五月 大徳妙心両本山代理 釈薩水とある。

島田は晩年『縮蔵』出版の動機について、江戸時代前期に京都獅師谷法然院の忍激が黄

檗蔵の誤謬を建仁寺所蔵の高麗蔵で対校した事蹟に感動したことや、明治維新以後キリスト教徒が手ごろな大きさのバイブルを布教に利用し多いに成果をあげているのを見て、仏教興隆のために携帯に便利な小型の活字版による大蔵経の出版を思い立たと述懐している。『縮蔵』の出版は、仏教学の発展に寄与したのみならず、廃仏毀釈で活力を失いつつあった仏教界の復興の契機ともなったことは明らかで、島田の『縮蔵』出版の目的は充分達せられたと言えよう。その後中国では宣統三年から民国三年（1911～14）にかけて上海の頻伽精舎で、『縮蔵』のうち日本撰述部を除いた部分を活字を大きくしそのまま出版したが、頭注に記された対校を省いたため学術的価値を損なってしまうている。

『縮蔵』には近代以前の大蔵経と比較していくつかの特徴があるが、その一つに幾種類かの大蔵経を対校したことがあげられる。『縮蔵』は、その本文を芝増上寺所蔵の高麗再雕本を底本とし、同じく増上寺所蔵の宋思溪版・元普寧寺版および弘教書院所蔵の黄檗蔵（一般に明蔵といわれているが明蔵の代わりに黄檗蔵を用いている）を対校本として校合を行い、異同を頭注に記している。また、小型の活字を用いたため携帯にも至便でもあった。ただ小型であることと一段組1行45字であったため閱讀に不便であった。その構成は従来の大蔵経が主として、唐の中期以降、釈智昇撰『開元釋教録』の入蔵録を基準として編成されているのに対し、『縮蔵』は明の釈智旭撰『閱蔵知津』の分類配列を基礎としている。

『縮蔵』は、高麗蔵を底本とし、宋・元・明（黄檗蔵）三本大蔵経対校の結果を頭注で記すなど、その内容の斬新さとともに、小型で携帯に至便であることなどによって、各界に受け入れられ、明治時代の仏教学研究の発展に大きな影響を与えるものとなった。近現代の日本における仏教学の発展はこの『縮蔵』の出版が基礎になったといっても過言ではない。

#### ◎日本校訂大蔵経（卍正蔵）

『縮蔵』について刊行されたのは、明治三十五年（1902）から同三十八年（1905）にかけて

刊行された『日本校訂大蔵経』（通称『卍正蔵』）である。これは本願寺派の僧前田慧雲と中野達慧が中心となり京都の蔵経書院から出版されている。この大蔵経は京都法然院の忍激が建仁寺所蔵の高麗再雕本と対校した黄檗蔵を底本とし、四六倍判線装本347冊で、『縮蔵』より大きい四號活字を用い、二段組とし閲読の便をはかるとともに、全てに句読点・訓点を附していることが特徴である。蔵経書院ではこれに引き続き明治三五年から大正元年（1912）にかけて『大日本統蔵経』通称『卍統蔵』751冊を出版した。これは正蔵に収録されなかった中国撰述の典籍を集大成することを企図したもので、章疏類や禪籍などを多数収録しており、中国仏教を研究するうえで貴重な典籍が豊富にあることで知られ、後に編纂された『大正蔵』に収録されていないものも多い。『卍正蔵』が今日ほとんど利用されないのに対し、『卍統蔵』は今日でもその利用価値を失っておらず、この『卍統蔵』が蔵経書院の事業を不朽のものとしている。ただし人材を得なかったのか、正蔵・統蔵とも校訂については必ずしも正確ではないと言われている。近年『新纂大日本統蔵経』として再版されるに際し、旧版出版時に欠巻であった部分について、若干のものについてその後発見された資料で補充するなど少しではあるが改訂が施されている。

蔵経書院はその後中野が主体となり、『真宗全書』『日本大蔵経』などの大型の出版を陸続と行い、大正年間における仏教出版界の隆盛に大いに貢献した。『日本大蔵経』をめぐる村上专精と中野の論争は近代の仏教書出版史上に特筆すべき出来事である。蔵経書院の蔵書の多くは今日京都大学附属図書館に〈蔵経書院文庫・日蔵既刊分・日蔵未刊分〉として所蔵されており、出版に際しての努力の様子をうかがい知ることができる。また『卍統蔵』出版に際しては各宗派・各寺院や諸大学の図書館などから底本の提供があり、底本の種類や出版事業の様子などが同書院発行の『大蔵経報』に記されている。この『卍統蔵』もまた中国において民国九年（1920）に上海商務印書館から覆刻されている。

◎大正新脩大蔵経（大正蔵）

明治時代のはじめに南条文雄・笠原研寿が英国へ留学し、その後、高楠順治郎等がつづいて諸海外へ留学した。やがて彼等が帰国し、明治末年には諸大学において西欧流の近代的仏教学の研究環境が整ってきた。このような環境のなか大正時代になり、新たな大蔵経の出版がはじめられた。高楠順次郎・渡辺海旭を都監として編纂された『大正新脩大蔵経』である。この大蔵経は大正十二年（1923）に「刊行趣旨」が公表され翌十三年五月より毎月1冊づつ刊行され、昭和三年（1928）には正編55冊が完結した。当初の計画では各冊一千頁前後・全五十五巻の予定であったが、のち統編三十巻・図像部十二巻・『昭和法宝総目録』三巻を増加し、昭和九年（1934）に全一百巻が完結した。本大蔵経は『縮蔵』と同じく増上寺所蔵の高麗版大蔵経を底本とし、同寺所蔵の宋・元・明版の三種の大蔵経のほか、宮内庁所蔵の福州東禪寺版・開元寺版大蔵経や、正倉院聖語蔵（元來は東大寺尊勝院の蔵書であった）の天平古写経など多くの校本を用いて編纂されたもので、今日でもその学術的価値を保っている。正編完成時に記された〈刊行経過要略〉によると、『大正蔵』出版は大正十一年（1922）に東京帝大梵文学研究室において高楠を中心とする集まりがあり、大蔵経の出版について議論があったことに端を発したとしている。当時『縮蔵』は一部1,000円以上もし、かつそれも入手が困難であったという。また高楠は前年石山寺で古写経の調査を行ってより、通行の大蔵経と古写経との対校の必要を感じており、それが新たな大蔵経を出版する大きな動機となったのであった。

高楠・渡辺は刊行に際し五大特色として以下のような方針を掲げた。第一は厳密博渉の校訂につとめるため、日本国内の古写経はもとより、敦煌など中央アジアで新たに発見された中国の古写経までもその資料として用い校訂を行う。第二は周到清新な編纂をするため、従来の大蔵経の編成にとらわれず新たな学問の成果を利用し系統だった組織をつくりだす。第三は梵漢対校を行い、最新の研究成果を総合しサンスクリットやパーリ經典を参考に校訂を行う。第四は經典の内容索引・

大蔵経諸刊本の対照表・内外現存の梵本や古写本目録を作成し研究の資とする。第五は携帯の便を考慮しかつ低廉な価格で刊行する。

このため従来線装本の形態で出版されてきた大蔵経を使用しに便利な洋装本としている。(ただし線装本のものも併せて刊行された)

これらの方針は当時の学界のおかれていた状況や出版事情を考慮すれば十二分に達成されたといえよう。『大正蔵』は刊行以来、日本のみならず広く用いられ、昭和三五年(1960)に再版がだされ、近年には装幀を簡易にした普及版も出版されている。再版に際して、誤植など一部の箇所が貼込で訂正が施されているが、訂正箇所が明示されておらず利用に際しては注意を要する。

内容の特色としては、新しい分類の採用があげられる。従来の大蔵経が『開元釈教録』や『閲蔵知津』など伝統的な仏教観に基づいた分類配列をおこなってきたの対し、『大正蔵』では大乘・小乗の区別をとらず、阿含部を首に置く近代仏教学の成果を基礎とした。また宋・元・明版大蔵経等との詳細な対校を脚注で示すとともに、サンスクリットやパーリの名称のほか、底本や対校本の情報、品題や調巻の異同等を記した「勘同目録」を『昭和法蔵総目録』におさめたことなどは、仏教研究に有用な情報として今日も重要視されている。また二十世紀初頭に敦煌で発見された多数の古写本などを利用した古逸部の存在も大きな特徴である。

『大正蔵』の出版は高楠・渡辺の二人がその中心人物であったことは言をまたないが、いまひとり大きな力になったのが小野玄妙である。小野は編輯部の責任者の一人として終始『大正蔵』の編輯にたずさわるとともに、全国の寺院の経蔵を調査し、仏教書誌に関する多くの報告書や論文を『ピタカ』や『佛典研究』などに発表している。彼の業績は個々にみると今日では訂正すべき部分も少なくないが、未だその価値を失ってはいないものも多い。特に『佛書解説大辭典』の別巻として出版された『仏教経典総説』は漢訳大蔵経の組織や変遷を記した先駆的著述である。

この『大正蔵』については、底本の選定が適切でない、誤読・誤植が多い、編纂以後に

確認された新出資料に基づく改定や増補の必要性等に関して批判もみうけられる。今日の学問のレベルや出版事情から、『大正蔵』の不備を指摘することは容易であるが、種々の困難な条件のもと出版を完結させたことを思うと、完成より数十年をへても『大正蔵』の改訂や新たな大蔵経の編纂を行ってこなかったことのほうがより重大な問題点と思われる。

明治以来、漢訳大蔵経として『縮蔵』『卍蔵経』『大正蔵』の三種が刊行されたことはすでに記したが、これら以外にも仏教関係の典籍を取めた叢書が相次いで出版された。主要なものとしては、『大日本仏教全書』『日本大蔵経』『仏教大系』のほか『真宗全書』『浄土宗全書』など各宗派ごとの全書類が多数ある。また『国訳大蔵経』や『国訳一切経』など漢訳経典の日本語訳を目指すものも編纂されたが、その多くは漢文を読み下し文にする段階のものがほとんどであった。

このほか明治以降の仏書出版の特色として漢訳以外の大蔵経の出版がある。明治以前においては、日本人にとって仏教典籍といえば、ごく少量の悉曇文献を除いて一般には漢訳経典以外には無かったのであるが、明治以降、南アジアや東南アジア諸国、或いは西藏の言語で記された仏典の研究にも関心がよせられ、これらの言語によって記された仏典も多数もたらされた。その代表的なものとして西藏(チベット)語の大蔵経がある。今日、東洋文庫、東北大学、大谷大学、高野山大学などに多数のチベット仏典が収蔵されているが、これらを研究資料として影印出版することは、早くより望まれたのであるが、大規模なものとしては、昭和三十三年に完成した大谷大学所蔵北京版大蔵経用いた出版がそのはじめである。今日ではデルゲ版など諸版のチベット大蔵経が影印本で或いはマイクロフィルムで利用できるようになっている。

またパーリ語の仏典は南アジアや東南アジア諸国で伝えられきたが、これらを日本語訳したものが『南伝大蔵経』である。

## 大蔵経研究とこれからの大蔵経

大蔵経研究の先駆的業績としては、浄土宗

の僧養鷗徹定の『古経題跋』『古経搜索録』『訳場列位』や、南条文雄『A Catalogue of the Chinese Translation of the Buddhist Tripitaka, the sacred canon of the Buddhist in China and Japan, Oxford, 1883』（『大明三蔵聖教目録』）などがある。本格的に大蔵経に関する調査や研究が行われるようになったのは、『正統蔵』や『大正蔵』が編纂される頃からであった。古写経や古版経の調査は明治時代から行われていたが、『大正蔵』編纂時に小野玄妙を中心として各地の古寺社所蔵の典籍が調査された。残念ながらその成果は小野の論文でごく一部が公表されているにすぎない。またこれとは別に東京ではじめられた〈大蔵会〉は仏教典籍に対する関心を喚起するものとして重要な役割をはたし、東京につづき京都・名古屋・三河などでも同様の〈大蔵会〉が執り行われ、京都大蔵会は今日も継続して開催されている。〈大蔵会〉は經典の書写・刊行に功績のあった人々の顕彰とともに、新たな大蔵経編纂の為に、新たな資料の蒐集をも目的とするものであった。〈大蔵会〉の展観目録は、仏教典籍の研究に多くの情報を提供するものとして貴重なものである。大蔵経に関する研究は、『大正蔵』編纂時には比較的多かったのであるが、『大正蔵』完成以後、大蔵経研究は少なくなっていった。戦後、文化財保護の一環として、寺社所蔵文献の調査が行われるようになり、各地の寺社の大蔵経や聖教類の整理・調査の報告書が刊行され、仏教文献の貴重な情報が公開されるようになった。近年、中国で古版の大蔵経の影印本が多数刊行されるなどの状況もあり、大蔵経に関する研究も増加しつつある。

明治以降日本で出版された漢訳大蔵経の編纂と大蔵経研究は上述のごとくであるが、同じく漢訳大蔵経を用いている中国や韓国などでは、どのような大蔵経の編纂がなされたのであろうか。日本においては、中国や韓国にさきがけて大蔵経の出版が行われ、金属活字による出版が中心であったのに対し、中国では宋版や金版など古版の影印が中心となっていることが特徴的である。また日本では二十世紀後半には新たな大蔵経の編纂が行われていないのに対し、近年においても盛んに新た

な大蔵経が出版されていることも大きな特徴である。また朝鮮・韓国では、今日もその板本が海印寺に伝存している高麗版大蔵経（再雕本）の木版刷あるいは、その影印本が中心であることが特徴である。また中国・台湾や韓国において、『大正蔵』の不正な複製本（海賊版）が刊行されていることも注目すべき現象である。これらは各々の国の近代化のありかたや、印刷文化のありかた、版本と写本に関する価値観などによるものであろう。また各国の仏教界がおかれている社会環境や政治環境とも密接な関係があるとおもわれる。

今日、敦煌遺書や日本の古写経のほか、古版の大蔵経に関する資料は、『大正蔵』編纂時に比し飛躍的に増えており、新たな大蔵経を編纂する条件は整いつつあるが、未だ機が熟さないのか、あるいはその必要性がないのか、新たな大蔵経編纂の機運は今のところないようである。今後、新たな漢訳大蔵経編纂の機運が高まれば各国の特色を生かして、協力してことにあたればより正確で学術的価値の高い大蔵経ができるであろう。

近年、仏典のデータベース化が各所で進められているが、その底本はほとんどが『大正蔵』である。今日では『大正蔵』が万全な大蔵経でないことは周知のこととなっているが、データベース化するに際して、この問題が充分には検討されていないのが現状であろう。種々問題があっても『大正蔵』を電子化することは、学界を益すること大なるものがあることは否定できないが、一方、『大正蔵』がもつ問題点を改善せずにそのまま電子化することは学術の発展のために十全なありようとはいえない。社会全体が電子化に向けて移行している現状では、従来のような形態で大蔵経を刊行することは不要となるやもしれないが、これまで蓄積してきた大蔵経に関する様々な知識の利用無くしては、真に利用価値のある大蔵経データベースは生まれるべくもないのではなからうか。

（かじうら すすむ）

---

## 近代編纂諸種大藏經一覽

### 【日本】

#### ◎大日本校訂大藏經（縮藏）〔活字〕

底本 高麗・再雕本大藏經〔増上寺所蔵本〕

対校本 宋・思溪版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
元・普寧寺版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
黄檗版大藏經〔弘教書院所蔵本〕（一般に明蔵と言われている）

特徴 最初の金属活字（五号活字）による大藏經  
『閲蔵知津』の分類を基礎とした配列  
宋・元・明三本による対校を頭注で示す  
活字を小さくしたことにより携帯に至便であるが、閲読に不便

#### ◎日本校訂大藏經（卍正蔵）〔活字〕

底本 黄檗蔵〔法然院所蔵・麗蔵対校黄檗版大藏經〕

特徴 縮蔵が五号活字であるのに対し、四号活字二段組で訓点を附す  
校訂を頭注で示す  
訓点を附すが、まま誤りがみられるという

#### ◎大日本統蔵經（卍統蔵）〔活字〕

底本 諸種刊本・写本

特徴 従来の大藏經に入蔵されていない仏典を収録  
〈正蔵〉同様訓点を附す  
校訂を頭注で記す  
底本の出自があきらかでないものがある  
原稿となった本は一括して保存

#### ◎大正新脩大藏經〔活字〕

底本 高麗・再雕本大藏經〔増上寺所蔵本〕

対校本 宋・思溪版大藏經〔増上寺所蔵本〕

元・普寧寺版大藏經〔増上寺所蔵本〕  
明・嘉興大藏經〔増上寺通元院所蔵本〕

宋・福州東禪寺・開元寺版大藏經〔宮内省図書寮所蔵本〕

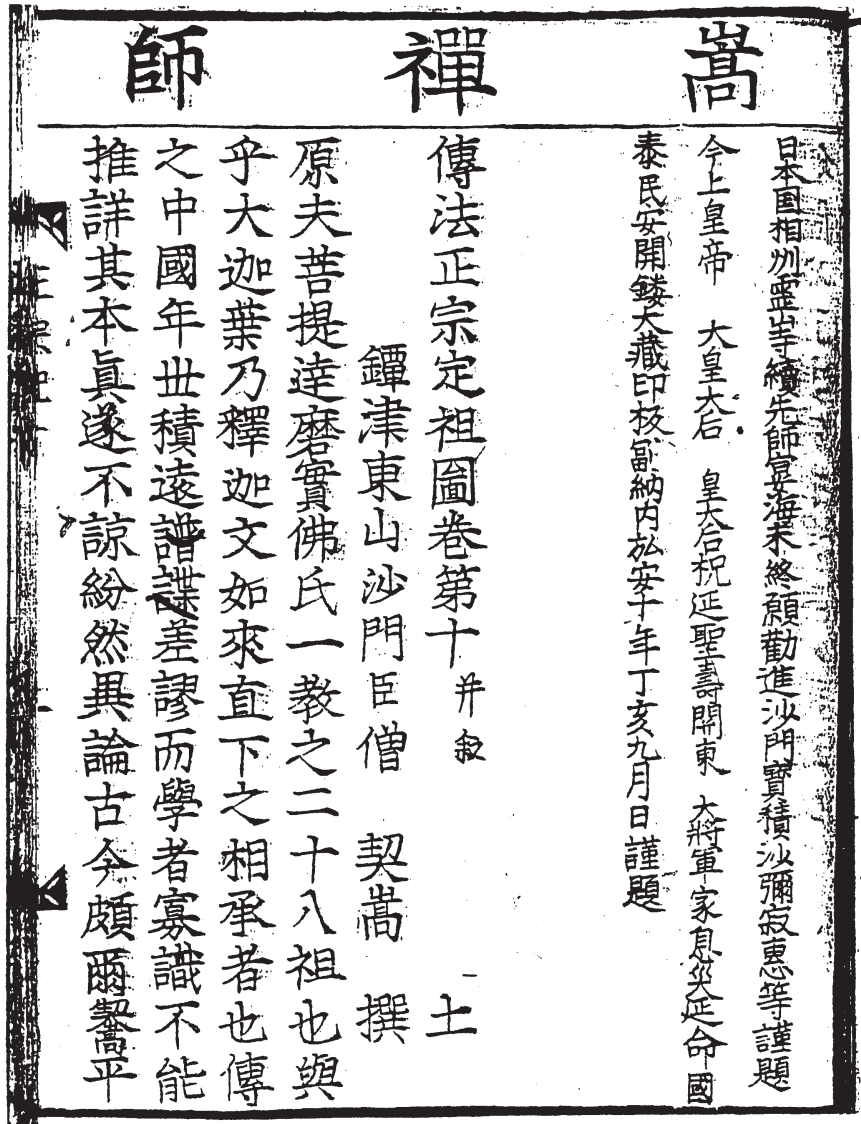
高麗・再雕本大藏經〔金剛峯寺所蔵本〕  
聖語蔵古写本〔宮内省図書寮所蔵本〕

その他諸種刊本・写本

特徴 配列を独自のものにする（大小乗の区別をなくす等）  
諸本の校異を脚注で記す  
敦煌遺書などの古逸經典や偽疑經典等を収録  
図像部を附す  
洋装本で最初に完結した大藏經

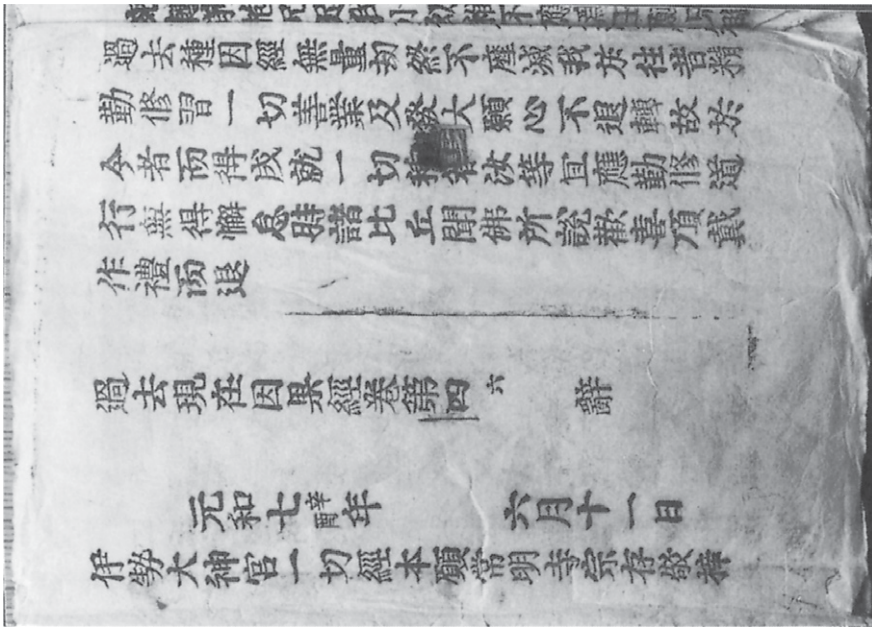


日本近世の大蔵経出版について



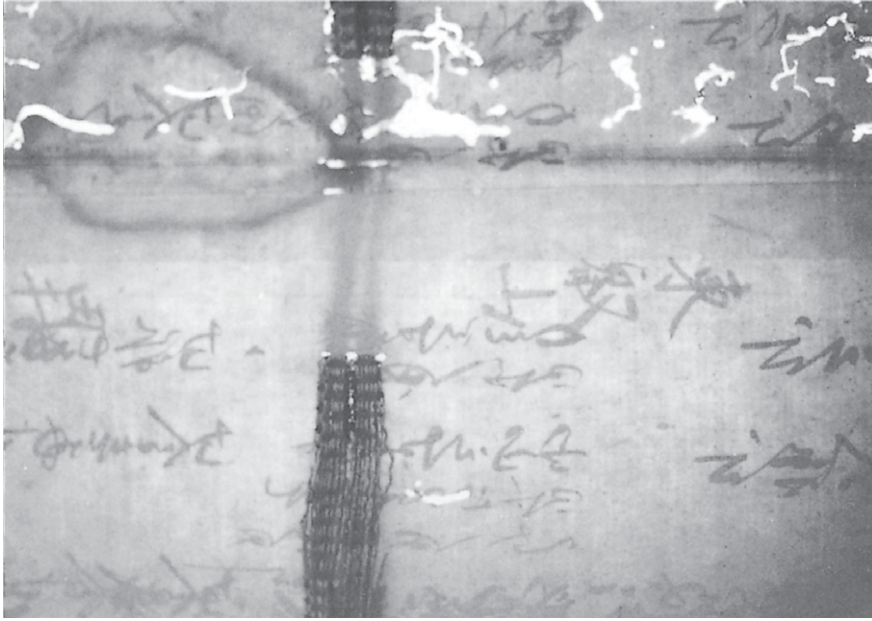
[[伝法正宗記] 第十卷頭。覆刻本であり、その版木は黄檗版として使われる。法然院黄檗版の内]

図版 1



「毘沙門堂天海版 155<從>帙の帙紙」

図版 2



「毘沙門堂天海版 121<意>帙の帙紙」

図版 3

最函五卷  
○新刊印行目錄五卷

日本武洲江戸東叡山寛永寺一切經新刊  
印行目錄卷第五

部數一千四百五十三部  
卷數六千三百二十三卷  
函數六百六十五

寛永十四丁丑三月十七日始刊行之到  
慶安元戊子三月十七日經歷十二年而  
終其功焉

奉彫造 佛說一切經藏

今上皇帝 玉體安穩  
東照權現 倍增威光

四海泰平 國家豐饒  
佛法紹隆 利益無窮

征夷大將軍左大臣源家光吉祥如意

日本武洲江戸東叡山寛永寺

山門三院執行探題前毘沙門堂門跡慈眼大師

天海願主

慶安元戊子曆三月十七日

經館分職林氏倅肅花齋居士  
使刻刷成而印行之

「毘沙門堂天海版 250 <最>帙の目錄第5卷末」

図版 4

種種花以為供養空中有聲而作是言善哉善哉大  
虛空藏菩薩摩訶薩乃能作此廣大佛事乃至於此  
大集法要殊勝莊嚴亦能攝受未來有情莊嚴正法  
令彼不失菩提之心於此經中受持讀誦書寫解說  
爾時世尊為欲屬累此經典故以神通力即從身中  
放大光明遍照十方無量佛刹悉皆振動有無量阿  
僧祇有情發阿耨多羅三藐三菩提心無量有情得  
無生法忍復有無量有情心得解脫復有無量有情  
得法眼淨復有無量有情離諸貪染復有無量有情  
得於人天福德勝因當得見佛一切大眾皆生隨喜

經 大集大虛空藏菩薩所問經卷八 六

佛說是經已時大虛空藏菩薩摩訶薩具壽大迦葉  
波具壽阿難陀娑訶世界主大梵天王釋提桓因四  
大天王諸苾芻衆及大菩薩天人阿脩羅乾闥婆等  
一切衆會聞佛所說皆大歡喜信受奉行

大集大虛空藏菩薩所問經卷第八

丙午歲高麗國大藏都監奉 勅雕造

「黃葉版淨嚴要請秘密儀規の内、大集大虛空藏菩薩所問經第八卷末」

図版 5





新纂大日本純藏經 (一九八〇、八九)

影印北京版西藏大藏經 (一九五八、六二)

【大日本仏教全書】 【鈴木財団版】  
【日本大藏經】 【鈴木財団版】 (一九七三)  
(一九七三、七四)

【新国訳大藏經】 (一九九三)

高麗再雕本大藏經 (韓国) 【影印】 (一九五七、七六)  
高麗再雕本大藏經 (韓国) 【木版刷】 (一九五八、六二)  
ハングル大藏經 (韓国) (一九六五、)  
脩訂中華大藏經 (台湾) 【影印】 (一九七四)

仏教大藏經・總藏【影印・活字】  
(台湾) (一九七八、八四)

仏光大藏經 (台湾) (一九八三、)  
中華大藏經 (漢文部分) 【中国】 (一九八四、)  
文殊大藏經 (台湾) 【影印】 (一九八六、)  
房山石経 (遼金部分) 【中国】 (一九八六、)  
龍藏 (中国) 【木版刷】 (一九八九、)  
龍藏 (台湾) 【影印】 (一九九〇、九二)

房山石経 (中国) 【影印】 (二〇〇〇)

【黄業繼眼版一切経目録】 黄業繼眼版一切経印行会 編 (一九五三)  
【中興寺経藏宋版大藏経目録】 中村利之進 編 (一九五三)

【色定法師一筆書写一切経目録】 竹内理三 編 (一九五七)

【高麗版一切経目録】 高野山文化財保存会 編 (一九六四)  
【大藏経一成立と変遷】 大藏会 編 (一九六四)

【大谷大学図書館第二和漢書分類目録】 (第一分冊) 大谷大学図書館 編 (一九六七)  
【尾張史料七寺一切経目録】 七寺一切経保存会 編 (一九六八)  
【長瀬寺宋版一切経目録】 文化財保護委員会 編 (一九六七)  
【喜多院宋版一切経目録】 喜多院 編 (一九六九)

【石山寺の研究 一切経篇】 石山寺文化財総合調査団 編 (一九七八)

【本源寺藏宋版一切経(三型寺旧藏)目録】 小島惠昭等 編 (一九七九)

【宋版一切経目録】 総本山長谷寺文化財等保存調査委員会 編 (一九七九)

【名取新宮寺一切経調査報告書】 東北歴史資料館 編 (一九八〇)

【北野経王堂一切経目録】 文化廳 編 (一九八二)  
【大藏会展覧目録(復刻) 一自第一回至第五十回】 大藏会 編 (一九八二)

【増上寺三大藏経目録】 増上寺史料編纂所 編 (一九八二)

【明代以降における藏経の刊行】 長谷部尚彦 著  
【愛知学院大学論叢一般教育】三〇・三一・三二・三三・三四・三五・三六・三七・三八・三九・四〇・四一・四二 (一九八三、八四)

【大和郡山市西方寺所蔵一切経調査報告書】 元興寺文化財研究所 編 (一九八四)

【彌谷法然院所蔵藏対校黄業繼版大藏経並新撰入蔵経目録】 仏教大学仏教文化研究所 編 (一九八九)

【快友寺一切経調査報告書】 山口県教育委員会 編 (一九九三)

【大藏経関係研究文献目録】 野次佳美 編 (一九九三)

【大藏経関係研究文献目録・補遺・追加】 野次佳美 編 (一九九七)

【京都妙蓮寺藏松尾社一切経調査報告書】 中尾秀 編 (一九九七)

【神奈川県立金沢文庫保存会版一切経目録】 神奈川県立金沢文庫 編 (一九九八)

【西大寺所蔵元版一切経調査報告書】 奈良県教育委員会 編 (一九九八)

【興聖寺一切経調査報告書】 京都府教育委員会 編 (一九九八)

【影印東叡山寛永寺天海版一切経目録】 松永知海 編 (一九九九)

【東叡山寛永寺天海版一切経目録】 松永知海 編 (一九九九)

【延暦寺木活字関係資料調査報告書】 滋賀県教育委員会 編 (二〇〇〇)

近代編纂大藏経関係年表

日 本 (漢 訳)	日 本 (漢 訳 以 外)	中 国 ・ 朝 鮮 半 島	日 本 以 外 の 主 要 な 大 藏 経 研 究 ・ 調 査 ・ 目 録 ・ 関 連 事 業 等
大日本校訂大藏経(縮刷) (一八八〇〜八五)			養鶴徹定「古経略」『古経撰要録』「訳場列位」 『大明三藏聖教目録(訳補)』南條文雄 訳補 (一八八三)
日本校訂大藏経(改正蔵) (一九〇二〜〇五) 大日本統蔵経(正統蔵) (一九〇五〜二二)	大日本仏教全書 (一九二二〜三三) 日本大藏経 (一九二四〜三三) 国訳大藏経 (一九二七〜三三) 仏教大系 (一九二八〜三三)	高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一八九九) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一八九九) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九一五)	『大藏経解説』常盤大定 著 『一切経の由来』村上等 著 (一九一五) 第一回東京大藏会 (一九一五) 第一回京都大藏会 (一九一六)
(博文閣) 縮刷大藏経(未完) (一九二一〜二四) 大正新脩大藏経 (一九二四〜三四)	大日本仏教全書 (一九二二〜三三) 日本大藏経 (一九二四〜三三) 国訳大藏経 (一九二七〜三三) 仏教大系 (一九二八〜三三)	頻伽精舎校刊大藏経【清】(活字) (一九一〜三三) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九一五)	『大藏経解説』光寿会 編 (一九二二) 『仏教聖典概説』深浦正文 著 (一九二四) 『昭和法宝目録』高橋順次郎等 編 (一九二九〜三四) 『大藏経沿革』藤堂祐範 著 『浄土宗字譜』 『高野山見存蔵経目録』水原亮栄 編 (一九三二) 『仏書解説大辞典』小野玄妙 編 (一九三三〜三六) 第一回名古屋大藏会 (一九三三) 第一回三河大藏会 (一九三四)
	国訳一切経 (一九二八〜) 昭和新纂国訳大藏経 (一九二八〜三三) 南伝大藏経 (一九三五〜四)	影印磔砂版大藏経【民国】(影印) (一九三三〜三六) 影印宋藏遺珍【民国】(影印) (一九三五) 龍藏【民国】(一九三六) (木版刷) 高麗再雕本大藏経【朝鮮】(木版刷) (一九三七)	『吾国現存古版大藏経』朝日遺雄 編 『ヒタカ』第九年九号 (一九四〇)
		普慧蔵【民国】 (一九四六?)	

## 展示 近世・近代大蔵經の開版資料

- 1 普門品 正保四年整版本 天海版 刊本 折本 千字文(鳳)
- 2 妙法蓮華經觀世音菩薩普門品 用正保四年整版本景印 刊本 折本
- 3 ※大寶積經 黄檗版 寛文年間(1661-72)刊
- 4 ※妙法蓮華經綸貫 智旭撰 刊本1冊 黄檗版  
明万曆版正蔵外文献
- 5 ※妙法蓮華經台宗會義七卷十五冊 智旭撰 黄檗版  
明万曆版正蔵外文献
- 6 諸經法部 秘密儀軌 離九・十 黄檗版  
離九・十に編入されている『佛説十地經』九卷は、高麗版を覆刻している。  
真言宗浄嚴(1639-1702)の要請により、鉄眼(1630-82)が「秘密儀軌」を出版する。
- 7 ※忍澁上人像 古碯 筆 一幅 忍澁上人(1645-1711) 紙本  
古碯 (1653-1717)は初め大和郡山西岸寺に住し、のち京都の鳴虎報恩寺の住職となる。  
畫は狩野永納に学ぶ。『勅修御傳』四十八卷の謹模をする。  
賛は、増上寺第三十四世雲臥(1642-1710)が忍澁上人に送ったもの。年時不明であるが、縁山在住は1700-1704年。幡隨院以来続く二師の親交の深さが偲ばれる。

はちすはに  
やかてかたらん  
とはかりに  
おもへは  
へたつこともうらみし  
縁山臥衲  
獅谿澄上人

- 8 ※傅大士影像 兆典司筆 一幅 紙本  
傅大士は、姓は傅、名は翕。善恵大士ともいう。中国浙江省の人 497-569  
輪藏を作ったことにより、後世經藏に傅大士とその二子、普建・普成とが安置されるようになった。裏書により、この一幅は、高麗藏經との校合の会座に掛けられていたことが知れる。



裏書

本師宣譽上人洛東獅岳法然院に／おゐて今度學徒をあつめ一切藏經の／  
校合を興行まします會座に詣て／結縁助成し奉る事是身の宿善／  
開發の時やいたりぬと隨喜感嘆の／あまり幸に年ころ所持の傳大士の／  
古畫一軸を此會座に寄附し奉る者也  
願以此功德 平等施一切／同發菩提心 往生安樂國  
寶永四年丁亥三月二十三日  
施主花洛隱者／老禪門鳧舟

- 9 獅谷白蓮社忍叡和尚行業記 二卷二冊 珂然(1669-1745)撰 享保12(1727)刊  
本書に、黄檗版『大乘本生心地觀經』八卷の文義が通じないため、安然(841-898)著  
『普通授菩薩戒廣釋』引用文との比較により、黄檗版に訛脱のあることを気付く、と記す。

- 10※大乘本生心地觀經 八卷二冊 般若等訳 黄檗版 校合有  
校訂(卷第一～四)  
寶永六年己丑(1709) 初冬二十八日沙門寶洲初校竟  
寶永六年己丑極月二十二日沙門周廓再校畢  
寶永庚寅歲(1710) 正月二十九日圓瑞三較訖 (卷第四末)

- 校訂(卷第五～八)  
寶永六年己丑(1709) 仲冬朔沙門寶洲初校訖  
寶永六臘月二十四日沙門周廓再校  
寶永庚寅載(1710) 二月朔日杜多圓瑞三較畢 (卷第八末)

- 11※普通授菩薩戒廣釋 三卷一冊 安然撰 慶安元(1648)年刊  
忍叡所持本。九丁裏 俱(黄檗版) → 具(廣釋本=高麗本)

- 12 大乘本生心地觀經 八卷 般若等訳 高麗再雕版景印  
校合に使われた建仁寺所藏高麗藏經は、一部を除き天保八年に焼失した。しかしこの法然院  
所藏の校合された黄檗版によりその全貌が伺うことができる。  
明日午後参観を予定している妙心寺經藏に収蔵される大藏經は、この建仁寺の高麗版大藏經  
を寛文年間に書寫した貴重な經典である。

- 13※金光明最勝王經 十卷 義淨訳 黄檗版  
足掛け五ヶ年にわたる校合の大事業の初日 寶永三年(1706)二月十九日 忍叡自ら対校したも  
の。

- 14※大藏對校録 草稿本 写本 一冊

---

15※大藏對校録 刊本 一冊

16※大藏對校録 版本

17※大藏對校録 一切經音義 版本

18 一切經音義(上海古籍出版社影印本)

19※刻大藏對校録募縁疏 刊本 一冊

弟子の寶洲(-1738)が對校録出版募財のために、印施したものに嘉永三年(1850)にさらに募財を募った文章が付加される。このことにより對校録は幕末まで完成していなかったことがわかる。

20※高麗藏本書写目録・麗兩藏相違目録補闕録

黄檗版に入藏なく、高麗版にある經典及び両者が著しく相違している經典の目録。『大正藏』では、通番は同一でA・Bなどに分けて入藏されている。例えば『大正藏』

No.954A『一字頂輪王念誦儀軌』一卷(大正藏19.307下)原本 高麗藏本

No.955B『一字頂輪王念誦儀軌』一卷(大正藏19.310下)原本 明本として別出している。

21 日本校訂大藏經(卍藏經) 1902-05 藏經書院

藏經書院は、明治35年忍叡上人開白八萬日遠忌記念として上人御校訂の大藏經出版を企て、同38年4月8日出版終了す。同年5月、全一部を法然院に寄附される。なお訓点は米田無静翁という。底本は、法然院所藏麗藏對校黄檗版大藏經。

22 伝通院本木活字板大般若經解説 堀口蘇山著 芸苑巡礼社 1962

福田行誠(増上寺第七十世)は幕末木活字による大藏經出版を企て、大般若經を出版したが、挫折。それがあって後の縮刷版大藏經出版の計画を聞き、快く増上寺の大藏經を提供した。

23 大日本校訂大藏經(縮藏) 1881-85

最初の金属活字(5号活字)による大藏經。『閲藏知津』による配列。底本は増上寺所藏高麗再雕本大藏經。宋元明三本の異同を頭注で示す。

24 大日本續藏經(卍續藏) 1905-12

底本は、諸種の刊本・写本。これら底本になった刊本・写本は、京都大学附属図書館に所蔵し、インターネット貴重資料画像中の特殊コレクション「藏經書院本目録」で書誌情報を提供している。(http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/zokyo/index.html)

25 大正新脩大藏經 第85卷 古逸部

原則は古逸部の底本については、矢吹慶輝(1879-1939)が啓明会の援助により写真撮影し、翻刻した。初版は革背表紙、表紙は布張り 天金。

- 26 講義録 「矢吹慶輝先生 鳴沙餘韻解説抄」 藤堂恭俊(増上寺八十六世)筆録  
筆者が大正大学時代の講義録。戦前のもの
- 27 大乘起信論廣釋卷第五(写真)無量壽經疏断片・觀無量壽經疏断片(書写)  
大英博物館所蔵(現在大英図書館蔵)のスタインコレクションの中から撮影・書写したもの。  
写真はS. 2554. 書写はS. 2422,2437  
(表紙)  
燉煌發見  
無量壽疏經断片  
觀無量壽經疏断片  
千九百拾六年六月於大英博物館  
寫了 慶輝  
とペン書きがある。
- 28 大正新脩大藏經總目錄 大正一切經刊行會 1930.5  
刊行趣旨 大正新脩大藏經一覽・總目錄 會員名簿 刊行經過要略
- 29 大正新脩大藏經刊行略誌並芳名録 一切經會 1943
- 30 大正新脩大藏經索隱 法華部 高楠順次郎監修 大藏出版 1947.2
- 31 大正新脩大藏經目錄 改訂新版 大正新脩大藏經刊行會 1969.9
- 32 CBETA電子佛典系列(大正新脩大藏經CD-ROM版)中華電子佛典協會刊  
インターネット上に無料で公開している。そのCD-ROM版

特別出品

- 1 羅漢圖讚集1卷 養鷗徹定(1814-91)輯 草稿本 嘉永三(1850)年  
中国・日本における羅漢図の贊・頌・詩・記文をあつめたもの。
- 2 羅漢圖讚集 版木 第十二那伽犀那尊者
- 3 大阿羅漢圖贊集三卷三冊 文久刊後印 色摺木版

備考： ※印 法然院所蔵

展観にあたり法然院より格別のご厚意をいただきました。御礼を申し上げます。



第6回仏教図書館協会研修会 10月12日（金）

## 講演1 「禅宗史における基本資料」

花園大学副学長・  
文学部仏教学科教授 沖本克己

## はじめに

私にあてられたテーマが「禅宗史における基本資料」ということでありますが、禅宗史における基本資料といいますと原典と工具書と参考書、この3つに尽きるわけで、基本資料の話はそれで終わってしまうわけです。おまけに皆さんはその道のご専門です。正に釈迦に説法。

一方そういう図書館を利用する我々はごくごく僅かのものしか使いません。正に猫に小判でして、猫とお釈迦さんの話で、猫が説教するというのも変なことではありますが、少しばかり本学の特色というあたりをお話したいと思います。

## 仏教系大学における図書館

実は私は図書館をあまり使わないもので、うちの大学のことをよく知らないのです。なぜ使わないのかと言えば、大体仏教学をやるものは本は自分で買うという癖をつけています。自分で買えないもの、或いは膨大な叢書で、使いたいのはその内のごく僅かだけというようなものだけを図書館に期待しているわけです。それからこの頃本代が高騰しまして記念論文集なども2万円、3万円とします。実際に使いたい論文はその内の一つか二つなものですから、こういうものは図書館で買っておいとくれと。雑誌も同じことです。総じて言えば大きな本のごく1部を使いたい。我々は従来、研究している時は大きなもののごくごく1部だけ使ってそれで飯を食っているという、紙魚みたいなものだと思いますが、我々の図書館に対する要求というのは、そう

いうものに過ぎません。

しかし、大学の図書館というものは学生サービスという一環があり、学生に対してはありとあらゆる本が必要になってきます。入門書から専門書までです。更に仏教というものが仏教だけにとどまらない広がりをもっています。昔から五明（ゴミョウ）といって5つの関連学問がある、医学、音楽、建築、論理学、それに宗旨を明らかにする哲学など何でも入ってくるわけです。そういう学問が全部あわさって仏教を支えているのだという立場からすると、仏教学に必要な本はありとあらゆる百科叢書であるということになり、仏教系大学の図書館の使命は大変重いものということになります。

仏教系の大学が日本にはたくさんありますが、その特色をひと言で言えば、これは当たり前のことなのですが、仏教書がたくさんある、これに尽きるわけです。ところが、それを世界的に視野を広げて見てみると世界中に仏教学の学者、或いは信者、実践家と言われる人達はたくさんおり、特に学者は一匹狼のような人があちらこちらにいて頑張っていますが、一つの大学でこれだけの仏教書をそれぞれに備えている国というのはありません。実は大変なものを我々は持っているのだということ、常々考えている訳です。

正に小判の山であり、1冊古本屋に売れば半年位食えるのではないかという本もあるのです。先日うちの大学の図書館印の入った本が古本屋に出まして、大慌てで買い戻したのですが、商売というものはあこぎなものうちに弱みがある場合は高く言うのです。よ

その大学の図書館の蔵印も見つけました。これはそこに高く売りに行こうと思っていますが。

そういうことで大変な宝の山に囲まれている訳ですが、今申しましたように、図書館が素晴らしい蔵書を持っているのは日本だけです。なぜかという、日本では、仏教の宗門というものが大きな力をもって仏教系大学を支えてくれているからです。ところが、そこで問題が起りまして、大学と宗門というのは本来犬猿の仲のような感じでして、宗門というのは自らの宗派が1番良いと思ってやっているわけですから、そういう答えを出せと言ってきます。ところが学問というのは、人の言うことを信じないところから出発しますから、何でもかんでも「それは正しいか」、「あなたたちの言っていることは間違いではないか」、ということになりますので、ここで大学と宗門の立場は異なってしまうわけで、その正に矛盾の撞着するところが仏教系大学ということ。我々も常々、宗門的な要請と学問的正確性というものの間をさまよっているわけです。

### 宗門と大蔵経

個別花園大学について申しますと、ここは臨済禅の宗門大学であり、臨済禅というのはご承知のように「不立文字」(ふりゅうもんじ)、文字を立てない、というのを宗旨としています。文字はいらないということです。実はこの文字という言葉はお経のこととして、中国の古い翻訳のお経はみな経のことを「文字」と訳していますし、チベット語でもお経のことは「文字」というわけですが、その文字に依存しない、つまり經典に依存しないというのが禅宗の立場です。その際、今回特に大蔵経の問題が大きく取り上げられていますが、こういう文字をバカにしている宗門にとって、大蔵経、或いは典籍というものはどういう位置付けがなされているのか。

そもそも禅宗にとって仏典、つまり三蔵ですが、禅に三蔵はあり得るのか、というような問題が当然出てくるわけです。中国あたりの学者は仮説として「禅蔵」、禅の蔵というようなものを立てていて、中国のテキストに

『禅源諸詮集』(ぜんげんしよせんしゅう)というのがあったそうです。今はその総序にあたる『禅源諸詮集都序』(ぜんげんしよせんしゅうとじよ)というのが残っていますが、序文だけが残っていて本体は不明です。ですから「禅蔵」というものを作ろうとして序文を書いたのだという説は肯うにしても、その「禅蔵」が実際に成立したかどうかは全く分からないというところで、実態は不明のままに置かれているわけです。

そしてまた、どの宗派においても、例えば禅宗がお経そのものをバカにするように、宗門それぞれの立場のテキストというのは比較的少ないわけで、それは大蔵経のごくごく1部を構成するに過ぎません。それには何となく釈然としない思いが残るわけですが、もともとのお経などを読んでみると、こちらに書いてあることとこちらに書いてあることとは矛盾を起こします。そんなことは当たり前で、言葉というものは必ず1つの論理によってくられるのではなく、書き手や読み手の論理が違えば結論も違ってくるわけで、その上、違っている結論が実は真実・真理の立場からは同じことである、というような言葉の不思議の世界はいつでもあります。ですから文字面だけ見れば矛盾撞着はそこら中にあるわけです。学者というのはそういうものが嫌いですから、こちらが良ければこちらはダメ、というように単純に結論を出したがりです。そうすることによってスッキリしたものにするのです。

それとは少し意味が異なりますが、教相判釈(きょうそうはんじゃく)というのものも、そういう動機から、大蔵経をいったんバラバラに解体して、その中から自分達にとって本当に大事なものを中心に再構成する意図を持っているわけですが、そういう教学整理を経て、更に一行三昧(いちぎょうざんまい)、更に選択思想(せんぢやくしそう)とひたすら簡便化の方向をたどります。

昔の宗門の祖師達もいろいろ勉強して、大蔵経を何度もひっくり返して、その挙句にごくごく簡単な真理に行きついていくわけです。大体真理というものはいつでも簡単だと。フラクタルなんてややこしいものが出てきた

ので事柄がこんがらがりますが、古典的な立場で言えば真理は簡単で美しい、というところに祖師達は気づいて、その1番大事なものをピックアップして、お経や論書の選択、或いは放棄が行われていったわけです。

### 禅宗教理整備の時代

禅は全部お経を捨てていくのですが、それにもプロセスがあります。大体禅宗史というのは、大雑把に言うと、まず教理を整理していく時代、つまりお経や様々な論書、先人の残した遺産を使って教理をまとめ上げていく、そういう時代があります。そこで成立するのが、以下に掲げるような初期の禅宗のテキストです。

- 『小室六門』（しょうしつろくもん）
- 『二入四行論』（ににゅうしぎょうろん）
- 『伝法宝紀』（でんほうぼうき）
- 『楞伽師資記』（りょうがしじき）
- 『六祖壇経』（ろくそだんぎょう）
- 『神会語録』（じんねごろく）

これらは不思議なことに、ほとんどが敦煌本で、中国の本土では見つからないものが多い。ということは、この初期の、教理整理時代の禅は、中国の禅の伝統ではもう捨てられているのです。要らない、これもゴミだということで、敦煌にしか残っていない。中国には長い歴史と文化を持つ国ですが、戦争や王朝の交代などのさまざまな外的条件はあるにしても、存外古いものをあまり大事にしない一面があります。実用性重視という現実的な民族性にも関係するのかも知れませんが、ともかく古いものは本土にはあまり残っていない。

僻地である敦煌にたまたま残されている文献というのは、敦煌の特殊な仏教事情を反映していると思いがちですが、必ずしもそうではない。僻地にまで伝わったということは、中央にもあったのだということを、まず考えておかないといけない。敦煌仏教だけが大変特殊なものだというのは、思い込みが過ぎるわけです。西域との玄関口ですから、情報が速かったということはあるのですが、それ以上

に情報は中央に伝わり、中央から逆輸入されているのが敦煌に残った仏教文献の主流であろうと考えているのです。

そこには大体5、6百年頃、中国仏教の始まりから千年頃までの文献が積み重ねられていて、本土ではどんどん変わって行ってなくなってしまったもの、それがこちらに残っていたということで、我々、特に禅宗にとっては大事な資料がたくさんあるのですが、それは禅宗史という学問にとって大事なものだということで、禅宗やそれを支える人々は、こんなものはゴミだということにしてしまったわけです。

### 禅宗独立時代

その後教理の整備時代が終わり、独立時代に入っていきます。それはいわば、『馬祖語録』などに代表される「語録」の時代で、祖師の言葉をそのまま受け止めてそのまま記録していく。たった2人だけで密かに喋った祖師と弟子の問答が記録されているというのも考えてみれば不思議なことなのですが、相当にフィクションが入っているわけです。宗旨に合わせて物語を語らせる、つまり舞台における一種の演技、シテとワキと言うか主人公と道化のような役割をさせて語録を成り立たせているわけです。そういう個々の祖師達の語録を集めて『四家語録』とか、『五家語録』というものを集成して、それは『景德伝灯録』、さらに『五灯会元』（ごとうえげん）などというものに集成されていくわけです。

一方、こういう全く独自の動きをする宗派でしたから、独特の規則が要る。特に戒律に目を向けますと、インドの生活習慣を反映した「律」は中国で守れるわけがない。袈裟1枚で1年中過ごせば皆凍えて死んでしまいます。できないことがいろいろある、で、どんどん変えていく。今の日本の憲法のようにどんどん変えていくわけですが、そういうことに我慢できなくなって、これは形式的に受け取るもの、そして実際の生活は別の規則で行いましょうというようにしてできたのが、『百丈古規』などの禅宗の清規（しんぎ）です。こういう清規系のテキストというものも禅文献の特徴を担っているわけです。

それから、禅僧といっても学者系の禅僧といった人がたくさん出るので、そういう人が書いたもの、先程も言った『禅源諸詮集都序』のような様々な論考を加えたものがあり、これらを並べてみると、従来の經典というのは語録に置き換えられる。經典もよくよく見ると、あれは仏陀の語録であり、同じものだと。特に禅宗の場合には仏陀と祖師は同じだ、如来と祖師は同じだという考え方をしますから、經典の位置に語録がとって変わるわけです。

律典の位置には今言ったように清規がとって替わる、そして論典の位置には注釈がとって替わる。ということで、並べてみると、禅にも三蔵として独特のものがあるのだということに気がつきます。このように見ていくなれば、どの宗派にもそれぞれ独自の、宗旨にのっとった三蔵があるのだなということが分かってきます。

### 禅籍整理の時代

この独立時代を経て、ちょうど唐末から宋に移る時代、これはどんな時代かという、混乱の中で発展した禅が、やがて宋の時代に国家に取りこまれ停滞していく時代です。逆に、印刷技術というものがこの頃から発明され発展していくわけで、膨大な典籍が生まれ出されていきます。ほとんど読まれていないのではないかと思うようなテキストがごろごろ出版されていて、我々も大変苦労しているのですが、宋の時代にこういう集成と整理、そして洗練といった作業が延々と行われ、大蔵経が次々に開版されていく。

大事なことは、文字資料にして固定すると、不思議なもので、そこから錯誤が生まれてくるということです。文字というものを我々は信用して、文字に従って勉強したり研究したりしていますが、文字は必ず間違える。そして偉い学者が校定するとまた間違える。經典は、どんどん間違いが幅増されていく。さらにきわどいことを言えば、間違えた經典でもって悟ってしまう、真理に到達してしまうということが現実にあるわけです。そうなると言葉で語られた真理は何なのだという、非常にやこしい問題もまた生まれてくるわけ

す。

このように膨大なテキストが生まれ出され、これは各宗派に共通していると思われるのですが、特に禅籍の場合には膨大なものがある。というのは、宋の時代は禅が大変大きな力を占めていたからなのですが、とにかく文献は沢山あり、とても一人で一生のうちに読み切れない。学生時代に、よく我々は冗談で、「あの本があればいいのに」と言う代わりに、「あんな本なければいいのに」というような話をしていました。読まなければ仕方がないけれども、あれを読んだらまた次のやつを読まなければいけない、「図書館なんてなくなってしまえ」、なんて昔はよく言っていたものです。

それは冗談として、そういう膨大なテキストを整理したものが『禅籍目録』、これは駒澤大学が頑張ってお作りになったものです。それから臨済の側には柳田聖山先生の『禅籍解題』というようなものがあり、大体の典籍のアウトラインを知ることができます。ただし、禅だから漢文だけでいいだろうというわけにはいかなくて、その教えの根幹にはやはり仏陀の仏教が入っています。ですから当然、サンスクリット語、チベット語、パーリ語さらに西夏文字、最近ではウィグル文字などの、中央アジアの文献、言語というものも必要になってきますから、個別の宗旨を掲げる大学としても、全部揃えてしまうということになっているわけです。

### 原典回帰

先程も申しましたが、そういうテキストは文字資料です。活字に置き直します。その時に校訂という作業がある。校訂する時に、一生懸命するのですが、どうしても主観が入る。そして読めない場合、無理に読んでしまう。こういうことがありまして必ず過ちが入ります。だからテキストは時代が経つにつれ、正確を期しつつ不正確な方向へ陥っていく。つまり、研究が進めば進むほど逆に問題が出てくる、錯誤が増えるという、一種のパラドックスの世界に、文字の学問、特に近代科学というのは入って行っているわけです。そういう点から、図書館も力を入れてくれている訳



ですが、我々は原典回帰という方向を打ち出しています。

これは何かと言いますと、本日お配りしたような古い資料、例えば大蔵経でも、宋版が一番古いですから、頼りにするのは宋版というふうに、古いもの古いものに下がっていく。さらに手書きの古いものがあれば、宋版と比べてどうなるのか。漢文の文献はサンスクリットと比べてどうなるのか。サンスクリットが古い古いと思ったらとんでもないことで、実はチベットで十数世紀に発見されたものが多く、これは還元翻訳されたものがほとんどですから、今の仏教学者がそういうサンスクリット文献をサンスクリットだからという理由で重視するのはちゃんちゃらおかしい訳です。最近、またそれにやっかいな問題、ノルウェーの財閥が買い取ったこれはとんでもなく貴重な文字資料群があり、これは特に佛教学の松田先生が大変お詳しいのですが、そういう問題があり、原典研究というのも進めば進むほど様々な課題が出てくる。

というわけで皆が志向しているのは原典です。「原典」は「原点」でもあるわけですが、そういうところに戻って行って、そこに直接入っていかなければならない。

### デジタル化

印刷本には明らかに限界がある、ということで我々の大学は今、積極的にデジタル化ということに取り組んでいます。国を挙げて、そして世界中でこのデジタル化、これは大変有効な材料なのですが、その初期から私も関わってはいたのですが、デジタル化しながら常々忸怩たる思いをしていたのは、これは間違い字も生じるぞと。だからデジタルテキストを見れば必ず本物を見なければいけないのだというような思い、或いは怖れを持っていました。

この頃は比較的正確な、そして壊れにくいテキストも出ていますから、その点は日進月歩、大変あり難いのですが。そういうデジタルテキストの形成というのは必趨の勢いで、これからも目もくらむような展開が期待されています。それと同時に大事なことは、その時に画像資料を作って、美術的資料でも画像

ですが、文字資料もまた画像で持たないといけない。ということで、古いテキストをそのまま画像で入れて、デジタル化したテキストとリンクさせていくようなことがこれから大事なことになっていくのだらうと思います。

で、そういう方面に詳しい2人の方が後に控えていまして、私は前座を努めたわけです。デジタル化の問題、画像の問題に入りましたので、「お後がよろしいようで」ということで、非常に荒っぽいお話をさせて頂きましたが、これで終わらせていただきます。

(おきもと かつみ)

## 講演2 「電子大蔵経の開版」

早稲田大学メディアネットワークセンター 非常勤講師 師 茂 樹

私は、大正新脩大蔵経のデータベース化ということをしていまして、皆さんご存じの方もいらっしゃると思いますが、SATという通称で呼ばれているデータベースのプロジェクトの事務局にいます。で、本日このようにお話しさせて頂くことになったのですが、「電子大蔵経の開版」というタイトルを頂いて、何を話せばいいのかとちょっと悩んだのですが、本日は二つのことについてお話させて頂こうと思っています。

一つは、現在、SATとか、或いはCBETAという台湾のデータベースがあるのですが、そういう数多くの仏典が、電子テキストでインターネットを通じて利用可能となっています。その一部は、図書館の方でも利用できるようになっている所もあると思うのですが、それらはいろいろな歴史的な段階の中で作られたものであり、それぞれに歴史的な位置付けというものをしてないと、使うにも—これまでの電子テキストは間違いが多いという話なども昨日からされていましたが—きちんと使えないということがありますので、歴史を概観するような形でお話したいと思っています。

もう一つは、時間がもしかすると足りなくなるかも知れませんが、現在どのような形でデータベース、電子大蔵経というのが作られているかということについて、技術的な話ですが、させて頂こうと思っています。

### 電子大蔵経への道

まず電子大蔵経＝仏典の電子化というのが、そのはじまりから今SATやCBETAが進めている大正新脩大蔵経の電子化に至るま

で、どのような道を進ってきたのか、その時々においてどのような問題を抱えてきて、それがどのように解決されてきたのかについて、お話させて頂こうと思います。そういう由来を知ることによって、現在、世間にインターネットなどで流通している電子仏典をどのように扱えばいいのかということが、分かりやすくなるかと思っています。

歴史的な流れを見ていくにあたり、これまでの歴史、歴史と言っても非常に短い、20年ぐらいのものなのですが、それを大雑把に三つの段階、すなわち①個人作業の時代、②分野別の時代、③大蔵経電子化の時代というふうに分けてみていきたいと思っています。といっても、本当はこんなにすっきり分けられるものではなく、実際には各時代において様々なレベルで、プロジェクトレベルや個人レベルで、いろいろなものが同時並行的に進められていたのですが、大体こういうふうに分けることによって流れがつかみやすくなりますし、電子テキストの性格づけも大体この三つに分けられるのではないかなと思っています。

その後に「新しい大蔵経の時代？」という「？」マークをつけた項目を立てたいと思うのですが、これは昨日からいろいろと言われていた通り、大正大蔵経のデータベース化というのをされているのですが、ではその次はないのかということが、昨日から問題提起されていたと思います。コンピュータ世界の予想というのは半分当たって半分はずれるというのが通例なもので、私も実際どうなるか分かりませんし、ここで適当な予想をしては

れるのはあれなのですが、今の流れから将来的にどうなるかというのを予想してみて、作成者と利用者がこれからどう関わっていくべきか、ということについてもお話できたらと思っています。

### 個人作業の時代

まず、個人作業の時代。これは80年代くらいから行なわれたものです。この時代というのは、パソコンでようやく漢字や日本語を使うことができるようになって、仏典の電子化という作業が始まった頃です。実際にはもっと前から、仏典の電子化というのはされているのですが、ごく一部の特殊な研究室以外で始まったというのは、80年代頃だと思います。

と言っても、個人作業と言うくらいですから、基本的に組織的な入力作業というのはなかったわけで、コンピュータに関心があってパソコン通信などを行っている信者さんとか、コンピュータと仏教が好きなたちがワープロ写経などといって入力しているのが多かったようです。ただ、そのワープロ写経というのは、大蔵経などとはほど遠く、写経というくらいですから、般若心経を入力したり、観音経とか法華経の一部などを本当に写経感覚で入力されている、というのがほとんどでした。台湾のお坊さんで、『大智度論』という百巻の大きな書物があるのですが、それを個人で、一人で入力されたという方もあります。が、そういう方は非常に稀で、実際には手軽でメジャーなテキストが入力されました。

実は、今でもこの時代の電子テキストを入手することができまして、実際に使っている方がいらっしゃいます。大学図書館などには多分ないと思いますが、この時代にしか入力されていないものすごくレアな電子テキスト、例えば修験道のテキストなどが、いまだに使われ続けているということがありますので、利用される場合には非常に注意が必要となります。と言うのも、興味本位で入力されているものが多いので、厳密な校正がされているものは少ないし、或いは仮に厳密な校正がされていたとしても、研究者一人一人によって、例えば新字を使うのが好きな人で新字

ばかりを使う人とか、旧字でなければダメだというので旧字を使う人とかがあり、フォーマットの統一がありませんので、考えなしにハードディスクに全部それを放りこんで横断検索とかをやっても、全然用例がヒットしなかったりする場合があります。

### 「コンピュータ大蔵経」の構想

先程も少し申しましたが、個人作業の時代という区分にしていますが、後で紹介するような大規模なプロジェクトの始まったのも実はこの頃です。と言っても始まったばかりで、技術的なノウハウなどはほとんどない時代でしたので、実際には実験段階、構想段階だったのですが、その中で、本日の題でもある電子大蔵経——コンピュータ大蔵経と当時は言っていたのですが——の構想が生まれたのも80年代の話です。

この頃構想されていたコンピュータ大蔵経というのは、平川彰先生を筆頭に共著の形で出ている『東洋学におけるコンピュータ利用の一例および問題点と展望』というタイトルの論文に書かれています（文末参考文献参照）。この論文は、平川先生、三崎先生、菅原先生、福井先生などのお名前が並んでいるのですが、実際には最後に書いてある清水さんと、SATを立ち上げられた江島先生のお二人で、清水さんが中心となって書かれたものだというふうに聞いています。この論文は、86年、インターネットが全然ない時代に書かれたものなのですが、現代でも通じる、それどころか、現代のプロジェクトがやろうとしていて、まだ達成されていないような、先進的な、最先端の内容を含んでいる部分もありますし、一方で、当時の時代風潮を含んで、今となっては夢物語と言うか、100年前の人が書いた未来図のようなものも含まれています。今読むと結構面白い論文なのですが。

先進的な部分というのは、下の方に書いたパーリ・サンスクリット・チベット・漢文などの現代日本語訳ですとか、欧米各国語訳の蓄積がありますが、そういうものを対照させた——今やるとすれば、電子テキストをリンクさせるような形で対照させた多言語大蔵経というのを作成すべきだという提案です。漢

文のテキストの電子化というのは大分進んでいるのですが、サンسكريット・チベット・パリー語テキストの電子化というのは、昔からやっている割にはのんびりとやっているものですから、最近ようやく電子テキストが揃い始めて、そういう対照実験、リンク実験、或いはある単語とある単語を関連付けさせるという実験というのが始まったというのが現状です。そういうことを15年前に提案しているのです。

一方、当時は第五世代コンピュータとか、人工知能が大いにもてはやされ、ロボット研究なども非常に盛んになされていたのですが、そういう時代風潮を反映して、人工知能(AI)を使って釈尊をシュミレーションすることすらできるようになるかも知れない、というような予想をされています。これは今みると突拍子もないように思われる部分ではあるのですが、当時、国家規模で第五世代コンピュータやAIにお金がつぎ込まれていて、それが新聞やいろいろなところで喧伝されていたという状況を考えて不思議なことではありません。結局、あれだけお金をかけて国家プロジェクトでやったにも関わらず、AIその他はいつの間にか尻つぼみになっています。その中で自動翻訳や自然言語処理というような副産物ができましたので、その恩恵を現在は受けているのですが、当時の時代風潮を背景として、こういう釈尊のシュミレーションというのも予想されていたようです。阿含経を入れれば、阿含経のような釈尊がコンピュータ上で再現できるのではないか、というようなことを提案しています。

### 分野別の時代

個人がいろいろと面白がってやっていた80年代が終わり、90年代中頃になると、様々な研究機関やプロジェクトにおいて、80年代くらいから作られてきたデータベースが、だんだんまとまった形として公開されるようになります。研究機関やプロジェクトは、普通、禅学研究だとか中国仏教史、中国史の研究というように研究テーマによってまとまるのですが——分野別の時代という言い方も少し変かなと思うのですが——電子化においてもブ

ジェクトのテーマごとにまとまった電子仏典というのが、公開されるようになります。この時代の代表的なものとして、①花園大学のZenBase CD1、②台湾中央研究院の漢籍全文資料庫、③天台電子仏典を一応ご紹介したいと思います。この三つだけではなく、他にもいろいろとあるのですが、特徴的なものであるのでここで挙げたいと思います。

これらのデータベースの作成にあたっては、その前の時代の、研究者個人の興味やワープロ写経などで作られたデータ、或いは、そのデータを作る時のノウハウが活かされているのはもちろんなのですが、個人のデータの寄せ集め以上のまとまりが追及されています。先程言いましたように、各研究者の作成基準がばらばらですので、その単に寄せ集めをしたところで、ハードディスクの横断検索が非常に難しくなります。それ以前の時代はハードディスク自体が高かったということもあり横断検索のような発想はなかったのですが、だんだんハードディスクが安くなってくると、横断検索をするのに品質がばらばらでは困るじゃないか、という話になってきます。

一方、こういうプロジェクト単位のものになると、組織的にまとまった形で、この基準で作らしようというのができてきます。入力や校正などもその基準がありますので、品質の統一が保証されるようになってきます。ですから、複数のテキストを横断的に検索するという発想が、この頃にはできてきました。現在もその発想はずっと続いているわけです。それから、この研究所はこういう方針でやっているというのが、大体Read meのような形で提供されていますので、どういう見通しを立てて、例えば、このデータベースを使う時は旧字体を使わなければいけないのかな、などということが分かるようになります。ただもちろん、中国の禅の研究をしている人でも、例えば天台大師の『摩訶止観』などを検索したいとなると、ZenBaseと天台電子仏典の2つを使わなければいけないと思うのですが、この時代は日本国内ではプロジェクト同士の連携という発想が全然なくて(海外ではあったのですが)、ZenBaseと天台電子仏

典は全く異なる方針で作られていますから、プロジェクトを横断する検索というのが難しく、CD-ROM毎に癖を知っておかないとちゃんと検索ができないということになります。

そういうプロジェクトごとにばらばらにやるのではなく、統一すればいいではないか、という話がだんだん出て来て、それよりもワンランク上の電子大蔵経、つまり、大正蔵レベルで全部同じ品質にしまえば、横断検索もできるのではないか、という発想が生まれてくるのもこの時代です。大正蔵レベルで作らなくても、例えば、ZenBaseと天台電子仏典は別々に作るけれども、同じようなフォーマットにしようという、プロジェクト間の連携のようなものもだんだん進むようになります。特に海外でそういうことが起きるようになります。

### ZenBase CD1

皆さんご存じだと思うのですが、このZenBase CD1というのが、1995年に公開されます。花園大学国際禅学研究所(註1)のウルス・アップさんが中心になって編纂され、今京大の人文研にいるクリスチャン・ウィッテルンさんが、技術的な中心になって作られたものです。

内容としては、70以上の漢文禅籍を電子化し、いろいろなツールをつけて公開したもののなのですが、これは当時としても、また現在でも、非常に画期的なものです。特に技術的な面と概念的な面は本当に画期的でした。もちろん6年前のものですから今となっ

ては古くて使えない部分もあります。例えば、外字処理に台湾のCNSというコード番号を埋めこんでいるのですが、このCNSというのは10年ぐらい前に台湾の国家規格として発布されたにも関わらず、いまだに誰も使っていないという非常に変な規格で、それを埋めこんでいても使いづらかったりします。また、さまざまなツールがWindows 3.1やDOSなどを前提としたものなので、今では使えなかったりします。しかしそれでも、コンセプトの骨格の部分というのは、現在SATやCBETAというのが作っている方針のご先祖様にあたる、記念碑的なものと言えると思います。というのも、これを作っていたクリスチャン・ウィッテルンさんというのが、後に紹介しますがCBETAという、台湾の大正大蔵経入力プロジェクトの技術顧問として呼ばれていたたり、また彼とSATとが技術交流をしてきたからです。

後ほど詳しくZenBaseのデモをしてくださるそうなので、その部分は省かせていただきます。

### 漢籍全文資料庫

次に、台湾中央研究院の歴史語言研究所、略して史語所と呼んでいる所があるのですが、そこが公開している漢籍全文資料庫というのがあります。普通はインターネットで公開しているのですが、これをそのまま各大学に売るということをして、大東文化大学では漢籍全文資料庫が学内で使えるようになっているそうです。漢籍全文資料庫には、ホームページ(註2)を見れば分かると思うのですが、一番上に中国の正史の集成である二十五史の全文データベース(約4千万字)というのがある、それが無償で検索できるよう公開されているというので、非常に注目されてきました。当時これを超える漢籍全文データベースというのは、しばらく出ないのではないか、ということを皆で言っていたのですが、最近、大陸の中国の方で、四庫全書を全文入力(8億字)したり、古典籍基本集成的なもの(20億字)を作っていたりと、とんでもない巨大なもの話を聞きます。四庫全書CD-ROMは画像を含めると全部で150



「ZenBase CD1」

枚組になるのですが、そういうものは、本当に図書館の方に持って頂かないと使えないような、個人ではとても使い切れないものです。そういうものが今中国で出て来ています。その先鞭を切ってインターネットで無償公開を始めたのが、この中央研究院の漢籍全文資料庫と言えるでしょう。

中央研究院の史語所というのは歴史の研究もしているところなのですが、そこが大正新脩大藏經の史伝部のデータベースを作っています。後に紹介する、台湾のCBETAというプロジェクトが、大正藏の公開を始めてからは、中央研究院は仏典の入力はやめてしまったのですが、間違いなく、一つのコンセプトに基づいて史伝部大正藏の一部を入力していた所は、ここにあります。残念ながら二十五史は無償公開ですが、大正新脩大藏經の部分は、外部には有料公開、中央研究院内部や台湾の大学の内部では無償で検索できます。基本的にデータをダウンロードするような形ではなく、全文検索です。

こういう中国、台湾で作られているデータを活用なさっている図書館の方もいらっしゃると思うのですが、漢字に対する感覚が、台湾・中国の人は日本人とは結構違います。後でCBETAの話の時にも出ると思うのですが、例えば、中国の人たちには、同じ発音で同じような意味のものは、同じ字にしておもうという発想があります。例えば、「於」という字と「于」という字があって、どちらも「～において」というような意味なのですが、SATで中国人の留学生に校正の仕事を頼んだ際、「師さん、「於」と「于」はどちらに統一しますか？」と聞かれたことがあるのです。日本人の感覚では、それをどちらかに統一するという発想はないのですが、中国人にしてみれば、同じ意味で同じ発音だから同じ字にした方がいいではないか、という発想になります。ですから、日本人ではちょっと思いつかないような、不思議な字の使い方をしていくところがあり、漢籍全文資料庫などを使う場合にも、その辺の注意をしないと望みどおりの結果が出ません。

その辺については、宣伝になってしまうのですが、前に共著で出した『電腦中国学』と

いう本があり、それにいろいろな台湾人の癖のようなものを書いてあります。もし、お使いになられるのであれば、そういうのを読んで頂ければと思います。

### 天台電子仏典

それから、天台宗典編纂所(註3)が作っている天台電子仏典です。これは、CD1とCD2が今出ていて、これも多分仏教系の大学ですとどこかにあると思うのですが、これは、ほぼ実費だけで配布していて、大体3千円ぐらいで大きなマニュアルとCD-ROMがついてきます。中味は、CD1が法華三部經と天台三大部、CD2というのが昨年出たのですが、CD1の内容全てと天台大師の著作プラス $\alpha$ を含んでいます。CD1の内容を全部含んでいるので、CD2が出た時点で、CD1は配布しなくなりました。2005年にCD3が出るそうで、それには日本初期天台の文献が追加されるそうです。たぶん、CD4、CD5になると、中世から江戸時代にかけての天台の典籍を全部入れるという意気込みでおられるのだと思います。ちなみにCD1、2は天台智者大師1400年大遠忌記念で出されていて(個人的には大遠忌記念に3年もスパンがあるのはなぜなのかなと思ったのですが)、CD3は天台宗の開宗1200年の記念として公開されるということらしいです。

ここは、大正藏や出続藏を定本にして入力されているのですが、これまでご紹介したプロジェクトはなるべくそのテキストに忠実に、活字本に忠実に電子化しようという発想でやっていて、先程言ったように台湾人は台湾人の感覚で忠実にやっています(私達から見ればちっとも忠実ではないのですが)。ところが天台電子仏典というのは、たくさんのお天台宗全書のようなものもあり、また写本とか版本なども大量に持っておられるので、そういうものを使って独自に校訂し、明らかに大正藏の間違いだ、或いは意味が通じないというところはどんどん直しているそうです。

また先に紹介したものは、いわゆる旧字、大正藏なら大正藏の字でやっていますが、ここは全部新字でやっています。日本のJISコードに入っていないものは全部ニマー

ク、いわゆるゲタになっていますので、肝心の『天台智顛』の『顛』が出ないという、少しさびしいことになっています。作り方は、それ以外はZenBaseを参考しているようなのですが、そういう意味で使うには非常に注意が必要です。これは天台宗自らがボランティアベースでやっているらしくて、野本覚成さんという方お一人が努力して作られているものなので、そういうものをほぼ実費で公開していることは大変素晴らしいと思うのですが、それを学生に対して何のレクチャーもなしに、これ便利だから使いなよ、とポンと渡しても、多分ちゃんとした検索結果は出ません。

### 大蔵経電子化の時代

こういう、プロジェクト単位でどんどん公開される時代が過ぎますと、現在の大蔵経電子化というのが、準備されてくることになります。「電子大蔵経」というタイトルで今日はお話させて頂いているのですが、電子大蔵経という全く新しい大蔵経ができるわけではなくて——本当は昨日からいろいろとご指摘がある、非常に微妙な問題なのですが——基本的には既存の大蔵経を電子化しようということになっています。90年代末になって、急にポッと大蔵経電子化の話が出たように思われるのですが、実際には80年代中ごろから構想自体はありましてし、予算的な問題などもあったのでしょうけれども、技術的な問題についてはもうZenBaseの時代に準備されており、その他の問題についてもノウハウなども大分たまってきていたのです。

ではなぜこの時代に急に出てきたかというところ、一つは著作権の問題がクリアされたことがあげられます。大正蔵に著作権などないのではないかと、という話もあるのですが、いろいろと細かい問題があるらしく、SATという大正新脩大蔵経のテキストデータベースが初めて大蔵出版に許可を得て公開を始めた、ということが一つのブレイクスルーになっています。それからWindows 95というのが出て、インターネット時代の到来が盛んに宣伝されて、今はIT革命ですが、そういう形でパソコンが非常に普及してきた、というのが一つ

あります。また、先程お見せしたように、立派な形で、CD-ROMという目に見える形で、国会図書館などにも納入できるような形で、たくさんものが出てきたので、だんだん評価されるようになってきた。こういうものがあるのですけれども、と見せることができるようになったので、それでは次にやってみましょう、という話になりやすくなり、そういう条件が重なって大蔵経の電子化、公開の動きが活発になってきています。

現時点で、全体、或いは一部が利用可能な電子大蔵経と言えるようなものは、①SAT、②CBETA、③高麗大蔵経、④韓国佛教全書の四つくらいだと思うのですが、④については大蔵経ではないんじゃないかという説もあります。日本でも、日本人のものを集めた日本大蔵経というのがあって、その名称は一部から非常に批判を食らったらしいです。まあ、大蔵経に準ずるものとして、④も一応リストアップさせて頂きました。実は台湾とか、中国、香港の方で大蔵経の電子化を個人的にやっちゃって、しかもそれを日本の大学などに配りまくっている方がいらっしゃるのですが、それは校正など全然していないような個人の願力によって作られたものですし、何しろやってはいけない著作権問題などをバンバン侵しながら作っているものですから、これについてはなるべく使われない方がいいのではないかと思いますので、今日もご紹介はしません。

### 大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT)

大正新脩大蔵経テキストデータベース(註4)、これは私が参加させて頂いているものなのですが、これが、世界で最初に大蔵経のデータベースだと言って公開を始めたものです。大正蔵のテキストを電子化するというのは、それこそ10年以上続けているのですが、大蔵経全体をどんと公開するよ、という形で始めたのは、SATが最初です。先程も言いましたように、大蔵出版と覚書を交わして、公開してもいいよということになっていました、その直後に後で紹介いたしますCBETAという、台湾のプロジェクトがコンタクトを取ってきて、一緒にやりましょうということにな

り、連携を取ってデータ交換などをしながらやっています。

非常に細かい話なのですが、大正新脩大藏経は一樣ではないというのは昨日のお話でもあったと思うのですが、ハードカバーで出ている旧版と（その前に和装本がありますが）、旧版よりも安く売られている、1万円のソフトカバーの新装普及版があるのですが、SATはハードカバーの旧版を使っています。と言いますのも、新装版の方は旧版と比べて字を結構直していたりするのです。誤植などを直している部分があった場合、直したという時点で著作権が新たに発生するらしくて、著作権が新装版では切れていません。でも、旧版は大正時代に出たものですから、著作権は切れたということなり、だからSATは旧版を使っています。

1998年の1月から公開したのですが、大正新脩大藏経の1巻から85巻の電子テキスト化を一応目標にしています。86巻から97巻まで図像部というのがあり、そこを電子化するというのは要するに大正蔵をそのまま画像化することですから、実質的にはコピーになってしまいます。それをやったら大藏出版は怒るのではないかと我々の側では遠慮していたのですが、大藏出版の方にはやってもいいというような感じの話もあるようでして、余力があれば図像部の電子化もするかも知れません。

SATの特徴としましては、後で紹介するCBETAが1巻から55巻と85巻、すなわちインドと中国の部分公開を既に終えているのですが、それと比べてSATはスピードよりも校正の質というのを非常に重視していますので、CBETAよりも公開スピードは遅いですが校正の度合いは高いです。あと、CBETAというのは台湾の人が作っていますので、先程も言いましたように、我々と少し違う字の感覚を使って校正しているところがあり、そういう意味では日本人には少々使い辛いところもあるかも知れません。

また、昨日から新しい大藏経はないのかという問題提起がありました。これについては、このプロジェクトを立ち上げた江島先生の方針として、大正新脩大藏経をなるべく忠

実に、間違っている字は間違っている字そのままデータ化する、というのがあります。現在でもそれを目標にしています。他のプロジェクトでは、諸本を校合して本文を直したりするところもあるのですが、それをやり始めるときりがありませんし、いつまで経っても終わらない、という問題があります。加えて、大正蔵全体を統一的な方針によってテキストクリティークするのは不可能であり、むしろそれはまずSATでインフラを整備した上で、各プロジェクトや研究所単位で——禅学に興味のある方はSATの禅学の部分を使ってどんどんテキストクリティークして頂くという形の方が、現実的なのではないか、という考えもあります。有名な道元禅師の正法眼蔵などは、どの本を使ってやるかによってその人の宗派における立場が分かるというので、電子テキストを作ったとしても公開しづらく、結局各人がそれぞれに入力するという非効率なことになっていると聞きます。そういう場合でも、大正蔵だとしてもSATが電子テキストを作っておけば、それを各人が自分に都合がいい形に変えて使って頂くことができますので、重複も少なくないだろうという、そういう難しい問題もあるわけです。急逝されてしまったのですが、江島先生の中には、平成大藏経を作りたいというプランがあり、どういふプランだったのかは分からないのですが、そういう話もあったようです。

## CBETA

次にCBETA<sup>(註5)</sup>ですが、これはスポンサーの関係でスピード重視とのことですので、1998年に公開を開始して、今年2001年で完成してしまいました。そのスピードが実現したのは、機械的な校正——2つのテキストを別のところに入力させて、それを機械的に比較する方法をとったからです。これは、同じ箇所を2人の人が同時に間違える確率は少ないという発想のもとで、違う部分だけチェックするというのでやっていますので、スピードは速いのですが、SATに比べて正確さが劣ることは否めません。先程も言いましたように、クリスチャン・ウィッテルンさんという方が技術顧問をしていて、技術的には世界最



高レベルの電子テキストになっていると思います。

昨日、佛教大学の展示で出ていたのは、1年ぐらい前に配られたもので、一番新しいものは、こういうパッケージで出ています。ただ、こういうパッケージで出ているものも、繁体字中国語版（台湾版）Windowsを使わないと全ての機能を引き出せません。技術的にある程度スキルのある人には日本語版Windowsでも使えるのですが、それにはちょっと注意が必要です。時間がないのではしょっていきます。

### 高麗大蔵経

で、高麗大蔵経、これは皆さんご存じのように、高麗大蔵経研究所(註6)という所が電子化したものです。1996年に第一版が出て、これも多分、各仏教系大学に配られていると思うのですが、これは非常に突貫工事で、24時間体制三交替で作られたものなので、中味の電子テキストは結構ボロボロなのです。各国の研究者にすごく批判されました。それで、その批判をバネにして作ったのが、2000年の第二版。この2000年の第二版の時に、完成記念法要のようなものを行っていますので、ここで一応、意識としては完成したということだと思います。2001年版というのが、つい最近β版で出たのですが、これは、インタフェースの部分を変えただけで、実質的には2000年版と変わりません。

内容的には、高麗大蔵経の全巻の画像データベースと電子テキスト化です。ただ、この高麗大蔵経のどの版を使っているのかについては、あまりこちらに情報が伝わって来ないので、これから検証しなければいけないのですが、これも韓国語版Windowsを使わないと使えませんし、インタフェースがほとんどハンゲルで書かれていますので、ハンゲルが読める人でないとなかなか使いこなせません。經典名などは全部ハンゲルで書かれていますから、ちょっと訓練が必要だと思います。

高麗大蔵経もCD-ROM15枚組みなのですが、こういうパッケージです。本当はキンキラキンなのですが、スキナーできちんと読み取れなくて黄土色になってしまいました

が、そういうものです。緑色の化粧箱に入っていて、非常にありがたくなっています。

### 韓国佛教全書

韓国佛教全書、これは仏教系大学だと揃えておられると思うのですが、全部で11巻あり、朝鮮半島のお坊さんのテキストを集大成したものです。そのデータベースが1999年に公開を始め、現在は11巻の内4巻分公開されているのですが、素人でも分かるような、パッと見ですぐ分かる誤字などが大量にあって、本当にこれは今のところ使えないと言いますか、存在することに意義がある、というようなものです。韓国佛教全書にしか入っていないものは、ここでしかデータベース化されていないので、その点では非常に貴重なものもあるのですが、それ以外のものはSATやCBETAを使うべきでしょう。ウェブサイトに行ってみてちょっと見ていただければ分かるのですが、「何とか法華経疏」の「疏」の部分なぜか木偏になっていたりとか、一目で分かるような間違いをどんどんしていますので、ちょっとこれは使えないものです。でもウェブサイト(註7)は非常に立派です。

### 漢字仏典以外のプロジェクト

漢字仏典以外のプロジェクトとして、これも皆さんご存じかと思うのですがACIP(註8)、チベット仏教文献の電子化をしています。

Vipassana Research Institute(註9)というところは、Chatta Sangayana CD-ROMという第六結集パーリ語仏典の電子化をしているのですが、パーリ語のが終わってしまったので、これからはサンスクリットの仏典をどんどん電子化しているみたいです。そろそろ新しい版が出て、それにはサンスクリットのテキストが入っているということです。

### 電子化の担い手

さて、これらの電子大蔵経と呼ばれるようなものについては、どういった人達が作っているのか、ということをもっと考えないと、使えないという部分があります。実は、これまでご紹介した電子大蔵経を、作っている担い手になっている人の多くは、出家の信者さん

とか在家の信者さんなのです。台湾、韓国では、いまだに仏教信仰というのが強くて、寄進をすることが社会的ステイタスになっているところがありますので、そういう人達が電子化の担い手になっています。その象徴的な例として挙げられるのが、CBETAのウェブサイトの律蔵をダウンロードするところに、中国語なのですが“在家の人が律蔵を読んでもいいのでしょうか？（在家衆適不適合閱讀律蔵？）”という論文のようなテキストが載っていて、律蔵を見る時に必ずこれが目に入ります。と言うのも、律蔵というのは、小乗戒を受けた人でなければ読むてはいけない部分があるのですが、それをインターネットを通じて誰でもダウンロードできるようになっているということから、CBETAの方々の——台湾は小乗戒がまだ生きていますので——ためらいのようなものが読み取れます。高麗大蔵経研究所の宗林さんという方が、仰しゃっていたのですが、また、高麗大蔵経の電子化をすれば若い信者を集められる、という発想があったというのです。

それから、Chatta Sangayana CD-ROMを作っているVipassana Research Institute、あと高麗大蔵経研究所ですとか、先程の韓国佛教全書の所もそうなのですが、ただ古典籍を電子化するだけではなくて、現代語訳を作って、それを世界中にインターネットを通じて配信してしまおうという発想があります。つまり、電子大蔵経というのは、図書館に本を集めるような発想だけではなくて、明らかに仏教を普及しようという意志で作られているわけです。それに比べて、SATなどは、研究者、研究機関が主体となって作っているのですが、CBETAや高麗大蔵経やその他の宗教的な熱情で作っておられる方と比べると、テンションが低いと言いますか、研究者が作っているところは実はマイナーなのです。

またご存知の通り高麗大蔵経は世界遺産になっていまして、その電子化に当たっては韓国の財閥のサムソンというところが援助をして、更に新聞などで大々的にキャンペーンをして一般市民から寄付を集め、その完成祝賀会をオリンピックギムナジウムで開いて、金大中大統領の祝辞を文部大臣が読んだり、ダ

ライラマ法王のビデオレターが届いたり…とそういうことをしています。かつて国家事業であった、それこそモンゴルを退散させるという意識で作っていた高麗蔵を電子化する際も、やはり同じような発想で記念式典をしている、という意味では、国家をあげてという大げさなのですが、そういう民族的な意識で作っておられるということです。

### 新しい大蔵経？

もし、新しい大蔵経が作られるという話になったとしても、新しい大蔵経を作るには、より良いテキストを作らなければいけない。先程沖本先生は、そういうことをやればやるほど、どんどん間違っていくという、非常に象徴的なことを仰しゃられたのですが、より良いテキストというのは何なのだとすることは非常に大きな問題です。電子大蔵経の担い手というのに、研究者と信者の2種類があった場合に、学術的に厳密なものが良いテキストだという場合と、読みやすいテキスト、つまり、普及にふさわしいテキストが良いテキストだという場合の両面があるわけです。ですから、新しい大蔵経というのが電子化されて作られるとしても、その方針をどうするかという点が重要な問題になってきます。

それから、各国語対照とか現代語訳というのが当然課題になってくる。となると、テキストの校訂作業——何十年何百年かかっても終わらないような作業なのですが——を大正蔵全体にわたって、一つの機関でやるとか、一つの団体がやるなどということは、到底可能なことではない。そうするとむしろ、専門の機関、例えば禅の研究所なら禅の部分、天台宗なら天台宗の部分、テキストクリティークするというような住み分けをしつつも、ただ各機関がばらばらにやると品質が統一されていないと、やはり大規模データベースの旨みがなくなってしまうので、各機関、研究者が関心に応じてやりつつ、これらが緩やかに連携しながら、統一的なフォーマットで作業を進められ、データベースの共有と改善が連携の中で行なわれていく場を作る、というものが実は電子大蔵経というものなのではないかなと思います。最近はやりの、

Linuxを作っているオープンソース運動の発想にちょっと近いですけども。ただ、そういうあり方を大蔵経と呼んでいいのか、伝統的な意味での大蔵経と呼んでいいのか、という疑問が若干残るところなのですが、これからは、そういうネットワークの上で統一的なことはありながら、その上で個性が磨かれるというような形が作られていかなければならないと思います。

#### 電子大蔵経の作成 — 入力・校正・公開

時間が超過してしまったので、大蔵経の作成についてはとばしとばしでいきたいと思うのですが、入力、校正については、今日本国内でやるのは絶対に間違っています。コスト的には台湾や中国の業者に依頼すると、これだけのスピードとコストです。

	方 式	コスト	スピード
台湾の業者	キーボードから 手で入力	約300円/1000字	10万字/1週間
中国の業者	OCR	約280円/1000字	100万字/1日

特に今、大陸の業者はものすごく、一日に百万字とかを入力するようなシステムを持って、手ぐすねをひいて待っていますので、データベースを図書館で作られる方は、こういう所に注文して頂きたいと思います。それはどういう所でやっているのかと言えば、また宣伝になってしまうのですが、私が参加している漢字文献情報処理研究会という所が雑誌（『漢字文献情報処理研究』2号、好文出版）を出しています、そこに突撃インタビューを試みた記事などがありますので、そういうものを読んで頂ければ、どういうレベルでやっているのかもお知りになれると思います。

それから公開についてですが、これについてもいろいろと問題がありますが、ちょっととばさせて頂きます。

#### 文字の問題

文字の問題についても、Unicodeを使うのが、現在では多分現実的であろうと思います。

他にもTRONとかいろいろあるのですが、今、文字の種類だけを言えば、一番多いのはUnicodeです。TRONは13万字あると言うのですが、あれは同じ字をダブって収録して合計が13万字なので、実質的に多いのは、Unicode 3.1というのが最近出たのですが、漢字だけで6万5千字くらいあって、これが多分一番多いです。それで足りなければ、今昔文字鏡のような外字システムを使えばいいのですが、今昔文字鏡などを使っていると、中国の人は使えないという話になってくるので、なるべく使いたくない、というところまで。

異体字などの場合も、『高麗大蔵經異體字典』などを見ると、こういうものを統一すべきなのか、すべきでないのかというのは、当然、データベースを作る時に方針を最初に立てなければいけないわけです。文字学などをやっている人なら、こういうものは絶対に区別しなければいけないですし、かといって、テキストデータベースとして検索するなら、こういうのを区別されたらとてもたまらないわけですから、どうするか方針が必要です。

#### まとめ：電子大蔵経に求められるもの

ですから、電子大蔵経の構築に求められるのは、電子仏典を何に使うのか——布教用なのか、学術利用なのか、学術利用の中でもどのレベルの学術利用を求めているのか——を最初に決定することです。最初に方針を明確にしないと、後から変えようと言っても、もう異体字は全部包摂して入力してしまったよ、と言われれば後の祭りですし、逆に異体字は包摂したとしても、画像データベースと一緒にすることによって異体字を参照できるようにする、などの解決策をとることもできます。いずれにせよ方針を最初に明確にしないとダメなのです。或いは、普及用に使う場合には、当然普及用のものを考えなければいけない。

それから、先程も申しましたが、プロジェクト間でどんどん連携していかないと、仲間はずれにされてしまうわけです。せっかく立派なデータベースを作っても、他の世界中の機関が作っているものと統一のフォーマット

---

でしていないばかりに横断検索ができず、横断検索ができないということは、いちいちそのその図書館のデータベースを別に使わなければいけないので、利用者の立場からすれば使いたくない、面倒くさいという話になってしまいます。世界的にElectronic Buddhist Text Initiative (EBT1) という学会のような研究会のような、プロジェクト間の連絡協議会のような場があるのですが、そういうところなどにも参加して頂いてプロジェクト間の連携を強めなければなりません。そうしないと、せっかくいいものを作っても使ってもらえないという話になる、ということです。

最後、大分端折ってしまいましたが以上で発表を終わらせて頂きます。

(もろ しげき)

#### 参考文献

- \* 平川彰・三崎良周・菅原信海・福井文雅・江島恵教・清水光幸「東洋学におけるコンピュータ利用の一例および問題点と展望」(『早稲田大学情報科学研究教育センター紀要』3、1986年3月、<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~SAT/resources/198603/>)
- \* 漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学』(好文出版、1998年11月)
- \* 漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学II』(好文出版、2001年11月)
- \* E. レイモンド『伽藍とバザール オープンソースソフトLinuxマニフェスト』(光芒社、1999年9月)
- \* 師茂樹「学術リソース・レビュー 仏教」(『漢字文献情報処理研究』創刊号、平成12年10月)
- \* 李圭甲編『高麗大藏經異體字典』(高麗大藏經研究所、2000年12月)
- \* 石井公成「仏教学におけるコンピュータ利用の現状」(『文学』3,4月号、岩波書店、平成13年)
- \* 師茂樹「学術リソース・レビュー 仏教」(『漢字文献情報処理研究』第2号、平成13年10月)

#### 註

- (註1) 花園大学国際禅学研究所  
<http://www.ijnet.or.jp/iriz/>
- (註2) 漢籍全文資料庫  
<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>
- (註3) 天台宗典編纂所  
<http://www.biwa.ne.jp/~namu007/>
- (註4) SAT <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sat/>
- (註5) CBETA  
<http://www.cbeta.org/cbeta/index.htm>
- (註6) 高麗大藏經研究所  
<http://www.sutra.re.kr>
- (註7) 韓国佛教全書  
[http://210.94.178.29/ebti2\\_en/main.html](http://210.94.178.29/ebti2_en/main.html)
- (註8) ACIP <http://www.asianclassics.org/>
- (註9) Vipassana Research Center: Pali Tipitaka Project  
<http://www.vri.dhamma.org/publications/tpmain.html>

第6回仏教図書館協会研修会 10月12日（金）

## 講演3 「IT初学者の電子テキスト利用法」

花園大学文学部史学科講師 福島恒徳

はじめに

私は決して電子テキスト専門家であるとか、あるいは禅宗史、禅宗漢文の専門家ではありませんので、まずそのことをお断りしておきます。

私の専門は美術史という学問で、禅宗美術などを研究している関係で、禅宗文献に関しては美術史専攻者の中では比較的親しんでおる方かと思えます。

実は、私はまだこの大学に来て2年目です。前におりました職場で雪舟や、雪舟の属する禅宗系の美術というものを専攻して展覧会をしたりしましたから、その準備にZENBASEを使っていたということがありました。ある時後藤さんや沖本先生と飲みながらお話をしていた時に、「ZENBASEを使っているのですよ、大変役に立っていて非常に助かっています」という話をしたところ、それを覚えておられまして、こういう催しがあるので、花園大学は非常に早くから文献の電子テキスト化を行い、成果を挙げているということの波及効果というか、実際どう使っているのかということをお見せするのもいいではないかということで、私に白羽の矢が立ったという訳です。

## ZENBASEとの出会い

実際に私が何故ZENBASE、或いは全文テキストを使うようになったかをお話しします。師先生のお話にもありましたが、私などはDOSの時代からやっているのですが、いたる所に様々な、ほぼアングラ出版に近いような全文テキストデータベースというものが

出回り始めた時期がありました。それは美術史の世界でも同様で、主として東京国立文化財研究所、最近、東京文化財研究所という独立法人になりましたが、そこで最初に所蔵雑誌の文献目録をテキストベースで発表された。そういうものを使いたくて始めたのです。その文化財研究所が、大正大蔵経と同じように大部の本を丸ごと入れたいいわゆる全文テキストを、著作権の関係で1部の人間にモニターという形で利用させるようにした際には私も利用させていただきました。

そうこうする内に、私の場合はBBSとかそういうところで情報を時々入手していました、ZENBASEが出たということを知った訳です。皆さんはタダでお持ち帰りになるようですが、その当時結構厳しいことを言われたことを覚えています。もう懐かしい思い出ですが、田舎の美術館の学芸員が何でそんなものがいるのだと、多分思われたと思うのですが、これは基本的に学術資料であって、資料交換という形で、実費1000円ということをお願いしますということと言われたのです。それで、私は水墨画の本とかを作ったりしていましたので、そういうものをお送りして、1000円払って、ある意味では苦勞して手に入れたわけです。そして、その後本当に助かることがありました。

美術史の世界では禅宗美術というのは以前からかなり取り上げられてはいるのですが、実のところ、その領域でやっかいなものに画賛があります。水墨画とか、或いは禅宗絵画、頂相（ちんそう）などにも画賛があります。これが非常に難解なもので、ご承知の方も多

いかと思うのですが、こういうものを美術史家というものは読めないから放っておいたということなのです。例えば私などは、展覧会などで作品を拝借してきて展示をするわけですが、展覧会図録を作る時に、今申し上げたような事情があって画賛を全て起こすということをほとんどしてこなかったということがあります。これではいけない、せっかくの展覧会だし、ビシッとやってやろう、ということで、ZENBASEを使って、非常に難解な画賛を、出品作品の画賛全てを起こして載せたことがありました。「禅寺の絵師たち」という展覧会です。

例えばこういうものをご覧頂きます(吉山明兆筆「釈迦三尊三十祖像」京都市・鹿王院蔵 絹本着色 掛幅装7幅 重要文化財 山口県立美術館発行『禅寺の絵師たち』展図録所載)。これはいわゆる「列祖図」です。それぞれの祖師について略歴というものを書いてある。京都鹿王院というところにあります明兆という室町初期の画僧が描いた作品なのですが、こういうものにしても実は図録類に「起こし」がなかったのです。こういうものを調べるのにZENBASEが非常に良い。今日の沖本先生のお話でもありましたが、語録が禅宗界にとってはお経のようなものでありまして、そこそこに語録から語彙が引用される。そうでなくても、禅宗に限らず、漢詩などでは以前使われたレトリックを引用するのが作法というようなどころがあり、これが非常に多用されるわけです。重要なフレーズというのはいろいろなところで繰り返し使われる。こちらは禅のことが全く分からないわけですから、読める部分を入力して、検索をかけて、ヒットした部分の前後を読んで、この字、このフレーズではないかという方法で解説を進めていったということなのです。今でもZENBASEについて私はそういう使い方をしています。

#### 一般に利用されている全文テキストの種類

本題に入ります。コンピュータで実際に全文テキスト検索などをおやりの方には、もうほとんどそんなものは知っているというようなお話だと思います。ですが、普段、職場の

都合とか、いろいろな事情があって、あまりコンピュータを使う環境でないという方もおられるでしょう。ですから、まさに初学者向けの、私自身も初学者ですが、全文テキストの意義であるとか、或いはその利用方法、その際の問題点といったようなことをお話させていただこうかと思えます。

一般に流通している全文テキストには、先程の、きちんとフォーマットが決まった大蔵経プロジェクトのようなものもあれば、そうでないものもあります。例えば10年ほど前などですと、フォーマットどころか文字コードということすら知らずに、自分の持っている環境で、場合によってはワープロで作ったものを変換して使うというようなことすら行われていました。その頃からの蓄積がいまだにあるわけです。私などはそういう雑多なものを手元に置いて、それを全て使わねばならないという環境で仕事をしています。美術史の文献などというのは、悲しいかな、仏教界に比べて非常に意識が低くて、フォーマットの統一というような話にはなりにくいのです。美術史学会という最大の学会においても、IT化の話題が出ることはほぼありません。そういう環境で、あらゆるフォーマット、或いは文字コード、種々雑多なものに検索をかけていく。

全文テキストとしては、まず、書籍から入れられたものがある。或いは私どもの場合のように、作品を調査してそのまま原資料からデータを入力することもある。それから、文献目録などでよくあるのは大型データベースなどからのCSV出力データです。そして、私もよく使いますが、Webページで後々使えそうなデータがあった場合それを保存しておく、というものです。それらのまさに雑多なデータを、今はハードディスクなども大容量化していますので、どんどん取ってきてためておくことができる時代になったのだと思います。

#### 全文テキストデータの有用性

全文テキストデータの有用性というのは、大量のデータを早く、かつ正確に検索することに尽きると思いますが、それが利用可能な

時代になってきているということで、ますますその有効性というのは上がってきているのだと思います。検索が早いという点ではほとんど今後とも期待できるわけですし、或いは検索の正確さということにおいても様々なノウハウが蓄積されてきつつある。

それから全文テキストの有効性のひとつに、これは非常に重要なことだと思うのですが、正に種々雑多なデータを扱えるということがあります。ですから、ある意味では、取り敢えず入力してしまえ、ということが可能である。そういう意味ではデータの作成が非常に簡易にできるということです。後は検索のスキルで何とかできる部分というのが、かなりあるだろう。それからデジタルデータですから置き場所に困らない。複製が簡単ですから皆で持つことができる。今の、インターネットの時代ですと、それこそWeb上に置いておけば誰でもそのデータを共有して利用することができる、という時代になっていると思います。まさに、そういう時代だからこそ全文テキストデータ、主として大容量のプレーンテキストデータベースの意義というものも増してきているのだらうと思います。

### IT初学者による 全文テキストデータ利用の問題点

#### データの入手方法

初学者の方にはこれから先の話が参考になればいいなと思っています。まず、ITにあまり慣れていない人がどうやって全文テキストデータの利用に入っていくのかという点です。

第1につまずくのが、そのデータがいったいどこにあるのかということと、どうやってそのデータの在りかをつきとめるのかということだと思います。私もそうでした。たまたまZENBASEの場合は歴史系のBBSをのぞいていたために気がついた、というぐらいのことで、特に、例えば学生に使わせるといった場合にどうやるのかというのは非常に難しいところです。今のところ研究者であれば学会関係者との情報交換ですとか、いろいろなことでできてくるのだらうと思います。学生と

か、初学者の方々には、インターネット上のデータの検索で引っかかる、サーチエンジンで引っかかるかということが多いでしょう。或いはデータベースのディレクトリもNAC SISなどで作ったりしています。そういうものを参考にして、きっとデータを集めることになるのだと思います。

#### データの保持

さて、ある程度大容量のデータが集まったとすると、そこで今度はそのデータをどうやって自分が持つておくのか、それをどう使うのかということが、おそらく問題になるのだと思います。持つておくためには、もちろんCDとか、Web上でもいいのですが、最終的に使うのはおそらく手元のパソコンのハード・ディスクになると思うのです。サーバ・クライアント・システムがいかに発展しても、やはり私などの場合は調査先に持つて行ってそこで検索したいということがよくある。そういう場合には手元にパソコンが必要になる。パソコンが必要になるということは、当たり前のことですがパソコンが使えなければいけない。ところが、実際に学校で教えていても、学生ではほとんど大容量テキスト検索のノウハウ、スキルを持っていないというケースが普通なのです。それをクリアする必要がある。

#### データの性格分析

それから少し上級というのか、ただ単にGREPのソフトを使わせて検索しろというだけではなくて、もう少し有効な使い方を考えた場合に、師先生のお話でも「使う時には注意が必要です」と仰ったことのひとつが問題になります。それは例えば文字コードの問題であつたりします。しかもまずいことに、例えばZENBASEやSATの場合というのは、こういうフォーマットでやっています、ということをきちんと宣言してありますから、使う側は非常にやりやすい。ところが昔作られたものなどはいいい加減です。全然、宣言も何もない。とにかく入れました、が多いのです。それもやはり使わなければならない。その時に、自分でそのデータのある程度分析する必

要があるということです。

特にGREPソフトなどを使う場合に、当たり前のことですが、文字コードが違うとソフトで全くかからないということもありますし、違う文字がかかるとということもあります。或いは入力フォーマット。これは1つは先程来も少し問題になっていた外字の扱い、外字をどういうタグで入れてあるかということ。それを知らないで、外字は検索できない。或いは、意外と気がつきにくいのは改行、改ページはどういうふうに表現されているかということです。極端な例ですと、後ほどZENBASEで見えて頂きますが、全く生のデータでは、単語が改行で切れてしまっているのです。そうすると改行を越えて検索する必要が出てくる。或いは逆に、何がしかの区切りが入れている、例えば句読点が入れている。アップ形式と云って、ZENBASEはそういう形式でできているわけですが、そうするとその訓読、その読み方が間違いであった場合、マルが入っているために検索にかからない場合が出てくる。そういう問題が様々あって、ですから実際に全文検索する場合には入力されているデータのフォーマットであるとか、性格を十分に把握する、そうすることによって精度を上げる、或いは自分の目的の結果に近づくことができるわけです。これはどうしても必要なことだと思います。

### 検索方法

それからもっと具体的な話になってきますと、検索方法をどうするのか。おそらくごく普通の学生レベルでは、エディタやワープロに読みこんで、検索コマンドを使うということが行われていると思います。それでもよろしいのですが、通常、大規模データを扱うということになると、そのためのソフトを使うのが適当ではないかと思えます。ただ、大規模な、例えば先程のC B E T Aであるとか、或いは検索系のサイト、大規模データベースによって検索をかけられているサイトなどは、汎用機を使って大きなインデックスを作って検索スピードを上げるということをしますが、なかなか個人には難しい。そのシステムを作るとなると機械語の勉強をしなくては

いけないなど、いろいろな問題が出てきます。では、そういった場合にはどうしたらいいのか、実は、今のパソコンのスピードですと、かなり大きなテキストでも、プレーンテキストであれば、それこそタダで手に入るGREPのソフトで、相当なレベルの検索が可能になっています。こういうことを知っていることが得です。

そのGREPをかけるソフトにしても対象のデータの性格、例えば大きさとか、異体字が統一されているのかどうか、というようなことまで含めてGREPのソフトを選んで、より効率的な検索ができるようにするのが適当だと思います。

それから、これも意外と大事なこともかも知れないのですが、図書館員の方々はそう思われると思いますが、あるデータが置いてあります、で、難しいデータベースの利用方法だと、学生にはなかなかできないのです。その場合、結構インターフェイスが大事になってくる。学生でも使ってみようという気にさせる、それから学生でもある程度の検索結果を出せるようにするということが、それなりに重要になってくると思います。そのためには、それに適当なソフトウェアの選択が必要になります。もちろん市販の高価なものでもいいのですが、なかなか個人では買えない。そういう場合には、今では様々なフリーウェアとか、シェアウェアで、それなりにいいものがあります。

今日は3つほど、私が普段使っている、検索対象のテキストに合わせて使い分けしているソフトを、後ほどZENBASEの検索を主体にした話で実際に見て頂こうと思います。

### 国際禅学研究所のページ

初めにZENBASE。国際禅学研究所のコンテンツですが、CD発行当時より新しいサイトになっています。ZENBASECD1リリース以降に作られたデータも、今はアップされています。もちろん、私はこの新しいものをダウンロードして使っているわけです。

### 単純なGREPソフト

まず、極めて単純なGREPソフト (SGREP)、



これはフリーウェアですが、単純ということ  
は早いということです。単純とはどういうこ  
とかという、これはシフト J I S しか検索  
できないのです。一応アスキーの大文字、小  
文字の統一や区別はできます。それからサブ  
ディレクトリを検索することも可能です。で  
は、私が普段使っている、美術史関係の文献  
データ、プレーンテキストで 8 メガくらいは  
あると思うのですが、これを「禪」というキ  
ーワードで検索にかけてみます。

いかがでしょう。意外と速いと思われたと  
思います。ただし、これは先ほど申しました  
通り、極めて単純であり、取り敢えず調べて  
みよう、という時に使います。あと、本当は  
郵便局のデータも大きいものですから、郵便  
番号を調べる時によく使います。

### SFIND

それからインターフェイスという点で、学  
生などに使わせるのにはこれがいいのでは  
ないかと思うものを 1 つ。SFIND というソフト。  
これはシェアウェアです。

ZENBASE の中味は、C D を開けますとフ  
ォルダがたくさんあり、HTML が入っている  
ものとか、漢字ベースと言われる、先程師  
先生にご紹介頂いたものが入っているところ  
とか、或いは文献データが入っているところ  
とか、いろいろなツール類、文字コードの変  
換ツールとか、そういうものが入っていると  
ころがあります。その中の禪テキストと、後  
にリリースされたものを含めると、C D リ  
リース時には確か 70 幾つだったのが今では 100  
個近くになりました。私の場合、主としてア



図版 5 A 「SFIND キーワード『頂相』による  
検索結果」

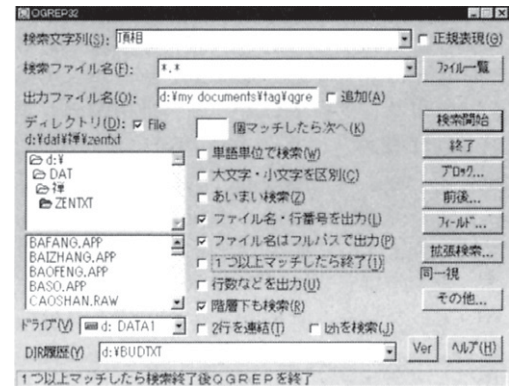
ップ形式といわれるものを中心にテキストに  
されたものをハードディスクのひとつのフォル  
ダに入れてあるのです。このフォルダ全体  
に、「頂相」（お坊さんの肖像画、私の専門領  
域の 1 つなのですが、）で検索をかけてみま  
す。【図版 5 A 参照】

このようにヒットした部分が上の段に出て  
きます。で、そこをクリックすると「タグジ  
ャンプ」をリアルタイムでやって、別画面に  
同時に表示してくれる。

これは全体を見ながら勉強していくのには  
非常に良いソフトではないかと思えます。単  
純ですし、検索をかけるディレクトリを指定  
して、すべてのファイルを対象に、「頂相」  
という言葉で検索をかけます。ただしこれは  
J I S と E U C しか対応していません。且つ、  
細かい指定がほとんどできません。例えば正  
規表現とかそういうことはできないソフトで  
す。でも、特にブラウジングしてというか、  
ある 1 つのキーワードで大量の文献を閲覧し  
ていくという場合には大変使いやすいソフト  
です。

### QGREP

それから、もっともよく使うのが、と言  
うかほとんどこれしか使わないのですが、  
QGREP というフリーウェア。いろいろなサ  
イト、全文テキストを載せているようなサ  
イトでよく紹介されているソフトなのですが、  
これは極めて高機能です。正規表現にもも  
ちろん対応していますし、単語単位の検索、  
或いは大文字小文字の区別、あいまい検索  
というものもある。【図版 5 B 参照】それから今こ



図版 5 B 「QGREP 検索条件の設定画面」

ここにチェックを入れているのは、いわゆるタグファイルへの出力命令です。検索結果から、タグジャンプという機能で元のデータに戻れるのですが、そのためのデータを出力しろという命令が出ている。或いは階層下のサブディレクトリまで検索するとか、それから、これも大変良い機能なのですが、2行連結というのがあります。先程少しお話ししましたが、生のデータというのは、元の書物の改行で切っているケースが結構あります。実はZENBASEの中にもそういうものが入っています。RAW（ロウ）形式といいます。そういうものを語彙検索したい場合はチェックを入れます。もちろんチェックを入れると時間はよけいにかかってしまうのですが、こういうものも初学者一機械語を書いて、ということができない人間にとっては大変有用なものです。

それからもう1つ、ここに今「同一視」と出ているのにお気づきになると思いますが、この同一視と同義語検索というのもあるのですが、それぞれ検索の目的に応じて使います。

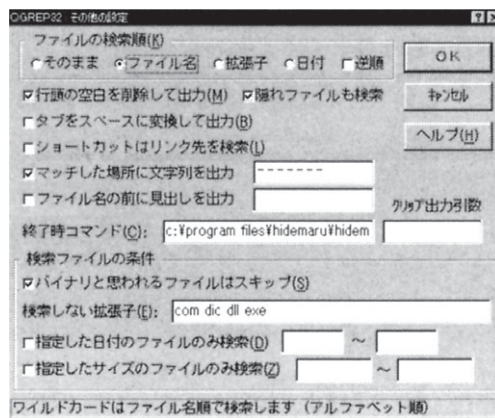
同一視検索というのは、簡単に言うと、いわゆる異体字テーブルです。或いは全く違う字を同一のものと読ませることも可能です。先程台湾のものは「於」と「于」が一緒だと言う話がありましたが、これもその異体字テーブルにのせておけば、いっぺんに検索にかかるわけです。そのように自分でカスタマイズできるようになっています。また、自分で作った複数の異体字テーブルを切り換えて使えるというところが、またミソです。今現在私が使っている異体字テーブルはこういうものです。例えば仮名と片仮名を同じにするとか、日本の古典籍などの場合は仮名に濁音があったりなかったりするのですが、そういうものも同一視をして見ていく。或いは中国の文献であれば音通ということは普通にあります。日本でも禅宗の文献などには音通がよく出てきます。そういうものも1回で検索できるようになります。これはファイル名で区別されていますので、いくつかのパターンを作っておいて、プレーンな検索をしたい場合には数を少なくする、音通を主として引っかけたい場合には音通を主としたテーブルを作ってお

く、という形で対応が可能かと思います。それから、今は私はほとんど使っていませんが、同義語検索とは、シソーラスに対応することです。この言葉とこの言葉を同じ意味と考えなさい、という形で検索をかけることが可能です。例えば大容量のデータベースで人名に検索をかけ、その結果をデータベースにして使うということがあります。この場合に、別名とか雅号とかいうものも同一視して検索するというような形でテーブルを作っておいて1度に検索をかける。これなどは正に初学者にとって、即そこである程度まとまった結果が出るという点からは、結構いい機能かなと思います。

### 検索結果の利用法

今、QGREPというソフトを使ってZENBASEの全文テキストのディレクトリに検索をかけてみます。私の設定では、そのヒットした部分にこういうマークが入るように設定をしています。そうすると当たった部分が見つけやすい。【図版5C参照】

前後も読んでみたいという場合には、タグファイルという形式で、さっきのGREPソフトが検索結果を出力してくれていますので、そこからタグジャンプをして元のデータに行く。【図版5D参照】タグファイルの内容は、フルパスのファイルネームと行番号です。元のデータに飛んでくれているのがお分かりですか？このようにして前後が読めます。タグジャンプをして元のデータの該当部



図版5C「QGREP『その他の設定』画面」



図版5D 「QGREP 検索結果から  
タグジャンプで元のデータへ」

分に飛んでいけるわけです。そこで、自分の必要な部分を、ここまでは資料として使えそうだとこのところをコピーして、別ファイルに移してためておく。そうすると比較的簡単に自分で参照しながら勉強する資料集ができてしまう。

ただし、特に研究者の方の場合は、出てきた結果をプレゼンしなくてはいけないというケースがよくあります。たとえば、資料集を作って学会発表の時に配るとか、或いは教材としてWebサイトに掲示される場合も結構あります。そういう場合にはそこで表示できる形にしなければならない。これもそれなりのスキルがいるのですが、ここで最大の問題になるのは、外字です。表現できないと困る。このZENBASE、先程師先生にご指摘いただきましたが、CNSコードが使われているために、非常に手間なわけです。Webにアップするとか、刷り出すというのが非常に手間である。文字コード問題について詳しくない人間にとっては、外字を検索にかけると非常に厳しいということもあたりきりますので、その辺は、例えば文字鏡なら、文字鏡には問題がありますが、比較的手元では表示しやすい。或いはGIFのフォントサーバのシステムもあります。CNSのコードを文字鏡のコードに誰かコンバートしてくれないかなというようなことを私などは思ったりしています。

特に学術利用の場合は、検索結果を原典にあたるというのは当然のこと、これは最初の沖本先生のお話でも出ていましたが、いろい

ろな意味でそれは当然のことだと思います。それで、ZENBASECD 1の全文テキストはどうなっているかということ、先程の「宗鏡録」を、「頂相」で検索をかけると、大正新脩大藏經48巻、661ページの3段目、18行目がヒットします。こういうタグと言うか、その位置を表すものが各行につけてあります。行単位で元に戻れるような配慮をしてある。これも、先程も申し上げたように2行にまたがる場合とか、いろいろなことがあって善し悪しなのですが、原典に戻るという意味ではこういう形式もあり得る。

或いは、実は国際禅学研究所のZENBASEでも使っているタブ形式というのがあり、これはページの先頭にだけページ番号が書いてあるというものですが、よく見かけます。これはまたそれなりに使いやすい場合があります。今見て頂いているのはアップ形式と言って、点マルがついている。このように切っており、どのように表現するかと言うと、例えば今のここを見ますと、これはCの段の19行目という表示なのです。大正新脩大藏經48巻の661ページのCの段の19行目であって、この次の1は、前の行に1文字いっています、ということを表している。後ろを見ると、これは0ですから後ろはこの行でちょうど切れていますということです。その次の行で見えますと、これは、前はそのままに切れていて、後ろの行に3文字送っていますということです。この形式では意味で行を切るため、原典の各行ごとでは切れないのでそういう表示をするようになっています。ですから、これを使えば簡単に原典に戻って学術利用もしやすく作ってあるということです。

相当に超過しましたが、せっかくですのでZENBASEの自慢をもう1つだけさせていただきます。

ZENBASEの中に入っている大変便利なものの、文献データ、これは図書館員の方には非常に良いものかなと思います。いわゆるプレーンテキスト、或いはデータベースからはき出したCSVです。データベースの場合、容量が大きくなります、インデックスまで入れると極めて大きいわけですが、通常はこういうテキストで持っておけば十分GREGで検索で

---

きます。テキストで持てるということは、小さくて、且つテキストは単純なものですから、使いまわしが効くと、そういう例です。

それからもう1つは、禅語辞書データ。別にIMEのデータなどもあがっているのですが、それは別にして、このデータは大変便利なのです。そこに挙げております禅語辞書、禅学大辞典とか、非常に大きな辞書類、或いは解説類の見出しのデータを全て入れてあります。ですからこれで検索をかけて、あの辞書とこの辞書に出ているなど、で、そのページにそのまますぐ行けるといふ、こんな非常に便利なものも、ZENBASEの中には入っています。

大幅に超過しましたので、これで終わります。何とも雑駁なお話で申しわけないのですがIT初学者、禅宗初学者が使えば、ZENBASEというのはこういうものだということでお話をさせて頂きました。

(ふくしま つねのり)

## 第6回仏教図書館協会研修会 10月12日(金)

## 事例報告

## 「DLS(CD-ROMジュークボックス)について」

花園大学情報センター課長 後藤慶裕

## はじめに

この度、花園大学では「CD-ROMジュークボックス」、商品名「DLS(デジタルライブラリーシステム)」を導入しました。現在リリースに向けて85パーセントほど完成にたどり着いたという状況ですが、導入の一事例として報告させていただきます。ちなみに、このシステムは「CD-ROM」ジュークボックスと呼ばれていますが、CD-ROMだけではなくDVD-ROMにも対応しています。

花園大学では、24時間稼働のキャンパスネットワークを利用して、時間的・空間的制約を超えた学術情報サービスを志向しています。CD-ROMに関しましても、従来から、図書館という空間的制約を超えてキャンパス内全域から利用できる、そして開館時間という時間的制約を超えて24時間いつでも利用できる体制をめざしてきました。言い換えれば、「バーチャル・ライブラリへの志向」ということができると思います。

現在のところ、CD-ROMのうち利用頻度の高いタイトルについては、「CD-ROMサーバ・システム」によって、24時間キャンパス内のどこからでも検索できるようにしています。しかし、このシステムでは、CD-ROM 1枚に1ドライブが割り当てられる仕組みなので、装置が非常に高価です。ですから、あまり利用頻度が高くないタイトル、もしくは「セットもの」で枚数が多い画像データベースなどまで、このシステム上でCD-ROMドライブ1つに1枚マウントさせているのは、ハード面でコストがかかり過ぎます。また、CD-ROMをネットワークで使用する際には

別途にそのための料金が必要となりますが、それが莫大な額になってしまいます。ですから、その種のCD-ROMは、利用形態がネットワーク利用になっても追加の課金が発生せず、かつ大量枚数を収容可能な「CD-ROMジュークボックス」(620枚収容)に入れてはどうかと考えた訳ですが、そこに幾つか問題が持ち上がって来ました。

## 「CD-ROMジュークボックス」

## 導入上の問題点

1つは、それぞれのCD-ROMがリリースされた時点に応じて、対応するOSや、関連するソフトのバージョンが違うことです。

また、花園大学の場合、「CD-ROMジュークボックス」についても、CD-ROMサーバと同様、学内のどのパソコンからでも、そして24時間いつでも、使えるようにしたいと考えた訳です。

そのためには、著作権の問題をクリアする必要があります。

そしてまた大きな問題は、端末の運用・管理が大変なことです。例えば、利用するパソコンのいちいち、CD-ROM管理ソフトや検索ソフトなどをインストールしないと行けません。つまり、CD-ROMを購入して稼働させるために、従来ですと、ソフトのインストール作業が、仮に学内で50台のパソコンをCD-ROM検索に使うということになれば50台分のインストール作業が必要だった訳です。しかも、CD-ROMの場合、ソフトごとに検索ソフトが違いますから、1タイトルについて50台ということになります。つまりタ

---

イトルが10あればそれが10倍になる。そういう手間（そして費用）のかかることを避けることはできないのかどうか1つの大きな問題であった訳です。

かといって、館内に「CD-ROM検索」以外に使える専用パソコンを設けたりすれば、これまでは全てのパソコンを利用目的を限定せず自由に使えるようにしてきたため、他のパソコンがふさがっていて「CD-ROM検索専用」だけが空いている時には、「空いているマシンがあるのになぜ使えないのか」という抗議を受けかねません。

要するに、キャンパス内どこからでも、いつでも利用できて、しかも著作権を冒すことなく、尚かつ各マシンに検索ソフトをインストールするなどの手間が省ける方法はないか、それが課題でした。もし各マシンにソフトのインストールなどをしないで済む方法が見つければ、大幅なコストダウンにもつながります。そして結果的には、その方法が発見できた訳です。

### 著作権問題について

著作権については、同時アクセスをワンユーザーに限るという条件を厳密に守るということで、従来CD-ROMサーバではネットワーク料金を課していたソフトについても、多くはスタンドアロン価格での利用許諾を得ることができました。

### 「CD-ROMサーバシステム」の問題点

余談になりますが、「CD-ROMサーバシステム」については、皆さんの大学の中にも導入されたところがあるかと思いますが、これについても、私たちが実際に使おうとした際には問題にぶつかりました。それは、個々のCD-ROMがどれだけ利用されているかの統計が取れないことでした。その点が分からないと、いつの間にかごくまれにしか利用されないソフトにドライブを占有されていたという事態にも陥りかねません。そうなっては、いわば宝の持ち腐れというか、もったいない話ですから、利用統計が取れないといけない訳です。そこで「CD-ROMサーバ」のアクセスログを、利用者、利用状況、そういうも

のが解析できるように手直ししていただきました。それが完成したのは2000年です。ですから2000年以降に購入された大学で、スリングショット（Slingshot!）方式のシステムの場合、もしアクセスログについてまだ改善がなされていないければ、業者さんに要求すれば多分対応してくれるはずですよ。

### 解決策——「シン・クライアント（ThinClient）方式」——

本題に戻って、「CD-ROMジュークボックス」についてですが、OSの違いや関連するソフトのバージョンの違いなどの問題、また検索ソフトなどを個々にインストールする手間（そして経費）の問題などについては、「シン・クライアント（ThinClient）方式」という解決策を見出しました。

具体的には、マイクロソフト社の「ターミナルサービス」と、「ターミナルサービス」の機能を拡張するシトリックス・システムズ社の「メタフレーム（MetaFrame）」とを搭載したサーバ（アプリケーション・サーバ）を立ち上げて、このサーバに「CD-ROMジュークボックス」を接続します。そして、個々のクライアント機からの要求に応じて、このサーバが「CD-ROMジュークボックス」を操作して、クライアント機から要求されたCD-ROMを実行し、それぞれの画面情報をクライアント機にWebベースで送り返すという仕組みです。サーバにソフトをインストールしさえすれば、個々のクライアント機には何もインストールする必要がありません。つまりサーバの側が何もかもやってくれて、利用者の方は単に利用したいCD-ROMをWebブラウザから指定するだけという訳です。クライアント機にはWebブラウザが載っていればそれだけで済みますから、マシンのレベルがどうであれ、OSが何であれ、また、教室からであろうと、先生の研究室からであろうと、検索ソフトなどをインストールすることなくCD-ROMが使えることになります。

この方法については、目下のところまだ実験を続けている状況ですが、ちょっとお見せしたいと思います。

## 「CD-ROM ジュークボックス」

## へのアクセス

CD-ROM のうち、「CD-ROMサーバ」でサービスしているものが現在13タイトル、35枚。 「ジュークボックス」でサービスしているものは66タイトル、約100枚。残りの77タイトル、約100枚は言わば「煮ても焼いても食えない」ものです。これだけは図書館のカウンターに申し込んでもらってスタンドアロンで利用してもらいます。大学でWebサイトを2つ(イントラネットとインターネットを)立ち上げていますが、イントラネットの方に、CD-ROMのタイトルと、それがどうやって使えるかということを一覧表にして掲げています。

これが全タイトルを一覧するためのページです。【図版 6 A 参照】ここで分野別と五十音別から選んで表示させたリストで、必要なCD-ROMを見つけ、同時にその使い方を確認してもらいます。【図版 6 B 参照】「CD-ROMサーバ」で利用するものか、ジュークボックスで利用するものか、それともカウンターに申し込んでスタンドアロンで利用するものか。使い方は3種類に分かれますが、そのうち、「CD-ROMサーバ」で利用するものについては、このリスト上でクリックするだけで直接「CD-ROMサーバ」に接続できます。

## 「CD-ROM ジュークボックス」のデモ

「CD-ROM ジュークボックス」の場合についてだけ実際に少しお見せいたします。たとえば『明治の讀賣新聞』、これは38枚組で



図版 6 A 「CD-ROM全タイトル検索ページ」

利用法	請求記号	タイトル	内容	出版者	備考
CD-ROMサーバ	00000000	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000001	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000002	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000003	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000004	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000005	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000006	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000007	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000008	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000009	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000010	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000011	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000012	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000013	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000014	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000015	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000016	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000017	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000018	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000019	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000020	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000021	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000022	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000023	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000024	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000025	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000026	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000027	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000028	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000029	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000030	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000031	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000032	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000033	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000034	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	
CD-ROMサーバ	00000035	明治新聞のデジタル化	明治新聞のデジタル化。人文・社会・経済・文化の分野に分類し、1979年以降のデータを提供。	国立国会図書館	

図版 6 B 「利用したいCD-ROMの使い方を確認」

す。この種のものを「CD-ROM ジュークボックス」に入れている訳です。

これが「CD-ROM ジュークボックス」です。適当なキーワードで検索してみます。この程度のレスポンス時間で動かせるということです。このマシンに検索ソフトなどはインストールしてありません。全部サーバで処理した結果をこちらにWebブラウザで引っ張ってきているわけです。

分かってしまえば何のことはないのですが、実はこの「シンクライアント・システム」という発想は、私たちと業者さんとの間で、「やれ！」——「できません」、「やれ！」——「できません」という丁々発止のやり取りを繰り返した挙げ句に出てきた発想で、この方式による方法は、たぶん花園大学が初めてやろうとしていることだと思います。

スタンドアロンだと、CD-ROMを1枚ずつ入れ替えるか、インデックスから探して該当する板を借りに行ってしまうことになるのですが、その点は利用勝手が良く、マルチで利用できます。ただ、まだ音が悪いとか、いろいろクレームがありまして、最終ゴールまでたどり着いていません。言わば85パーセントまで完成していると言ったところです。

師先生のお話の中で、「大正新脩大蔵経 図像部」の話が出ていましたが、「大正新脩大蔵経」のデジタル化が「図像部」にまで及んだ場合、「図像部」をデジタルで提供しようとするれば、このような仕組みを使うのが有効なのではないかと思われます。もちろんイ

---

インターネットで検索できるようにする方法もありますが、ハンディに取り扱いのできるCD-ROMで出てきた場合には、こういう形でやっても良いのではないかと思います。これはまだ実験の段階で、お披露目するのは早すぎたのですが、心のお土産に持って帰っていただこうかと思った次第です。

(ごとう よしひろ)